

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10

本郷鶴川ビル〒113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI NEWS

044 SEPTEMBER 20.
1998

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集テーマ：「建築と都市環境デザイン」

1. <環境構造>の発見と建築デザイン 1
2. オープンビルディングの現状と展望 8
3. 歴史的環境の受容と
建築設計の関係について 12
4. 函館と小樽 住民の手の届く環境とまちづくりのエネルギー 14

●トピックス

- | | |
|-----------------|----|
| 京都「ポンデザール計画」の顛末 | 19 |
| 宮島の景観論争 | 22 |
| ●関西ブロック海外セミナー | 23 |
| ●プロック例会レポート | |
| ■北海道ブロック | 35 |
| ■関東ブロック | 35 |
| ■四国ブロック | 36 |
| ●事務局より | 36 |

特集：建築と都市環境デザイン

都市環境デザインの中で建築が占める役割は、大変大きなものであることは、言うまでもないことであろう。しかし、建築のあり方、建築デザインのあり方、建築設計論、建築生産論、生活様式、設計への市民参加などと都市環境デザインとの関わりを正面から論じたものはJUDIニュースの記事でも少ないようだ。

そこで今回は、数々の実践を通して、建築と都市環境デザインの密接な関係づくりに取り組んでいる4人に問題提起をしました。

JUDI会員500有余名中、建築を専門分野とするものは約140名ほどを数えている。都市環境デザイン内外で様々な議論が巻き起これば幸いである。(菅 孝能)

特集

1

<環境構造>の発見と建築デザイン

藤本昌也

MASAYA HUJIMOTO

建築家／山口大学教授

1. はじめに

昨年の11月、私はある建築士会の青年部の方々に招かれ、「これから時代を担う“新しい建築士像”とは」と題して講演を行った。講演のポイントのひとつは、現状の建築士の活動結果を見る限り、残念ながら建築士の多くは、自らの業務（建築デザイン）を通して街づくりに寄与しているとは言い難いし、また、寄与するに足る十分な知識、技能を持ち合わせていないのではないか。という指摘であった。

この私のいさか過激な発言に対して、当然異論、反論が出された訳だが、その中に、「日頃から一戸建て住宅といった小さな単体建築の設計しかしていない私たちにとって<街づくり>などという大げさな問題に関われるはずがないではないか。」といった反論があった。多摩ニュータウンの21街区や幕張ベイタウン等で、都市デザイン調整者としての体験を持つ私には、この発言が、現在、建築デザインに携わっている大多数の建築士の街づくりに対する認識の程度を端的に表していると思わざるを得なかった。

つまり、「建築デザインの立場から街づくりに貢献することの核心とは何か。」が多く建築士に十分理解されていないということである。結論的に言えば、それは都

市デザイン側の要請に対して、建築デザイン側がきっちりと応答することにつきると私は考えているのだが、そのためには、「都市デザインとは何か。」「それに対して建築デザインが応答するとは具体的に何を意味するのか。」といった基本的問題に対して、両デザインサイドでの共通の理解が必要となろう。

以上のような私の問題認識から、本稿では、上記の問題を考える上で重要な論点を私なりに整理し、本誌特集が期待する議論のいくばくかの素材を提供したいと思う。

2. 地の空間の演出

—都市デザインの定義—

個々の建築はそれなりの姿で立ち上がっているのに、それらが集まった建築群はどうして美しい街並みを形成しないのか。

わが国の街づくりの多くに向けられた批判を克服するには、どうすればよいのか。有効な解決策はひとつ、わが国のはとんどの街づくりに決定的に欠落している都市デザインを技術的にも制度的にも、しっかりと登場させ、かつ、その都市デザインに見事に応答しうる建築デザインを実現する以外ないと私は考えている。

しかし、例えば、阪神淡路大震災の復興

街づくりを見ると、現実がそう甘くないことがわかる。神戸市は、多くの市民が納得する再建すべき神戸市の市街地住宅像を都市デザインのイニシアティブのもとに提示し得ないまま、土地区画整理か市街地再開発といった、これまでの街づくりの制度と手法を踏襲するだけで、現実の市街地復興計画を進めている。都市デザインの先進地と言われている神戸市でさえ、本来的な意味での都市デザインは登場し得てない。

では、本来的な意味での都市デザインとはどのように定義されるのか。要約的に言えば、それは「市民の都市生活を支える<公空間>のあり様を考え、その総合的な空間演出を図ること。」だと私は考えている。この定義で重要なのは、まず問題の対象が<空間>であるということである。都市デザインは単に表層デザインとしての景観だけを問題にしているのではない。むしろ、景観を成立させている<空間>そのもののあり様をまず重視する。厚化粧的景観論ではなく、優れて空間論としての都市デザインなのである。

次に重要なことは、公空間の<公>の捉え方である。一般的に言えば街路、公園、河川といった公共施設の空間を意味するが、都市デザインが問題とする<公空間>とはそうした公領域の公共施設空間は無論のこと、私領域の中で、市民に開放された公開空地などの共空間も含む都市の空地空間综合体－市民的空間－を意味している。

別の言い方をすれば、都市デザインは図(建築)と地(空地)の関係における地のあり様を問うているのであり、さらに言え

ば、それは地そのもののあり様だけでなく、地と図の応答関係の中で生まれる<地の空間>のあり様を問うているのである。こうした都市デザインに関する基本的理解が、少なくとも街づくりを実質的に支える都市計画、土木、建築、造園といった専門家集団の中で、共通認識として成立しない限り、先のわが国の街づくりに向けられた批判は乗り越えられないであろう。

残念ながら、わが国の建築界においてはこの地と図の密接な応答関係、つまり図(建築)というものは、どうのよう立ち振る舞おうとも、そのあり様が地(空地)の空間の質を否応なく左右してしまうという両者の密接な相互関係に対して、無理解、無関心な建築士が少なくないと言わざるを得ない。冒頭での「一戸建住宅といった小さな単体建築云々…」といった発言もこうした無理解から出たものと考えられる。

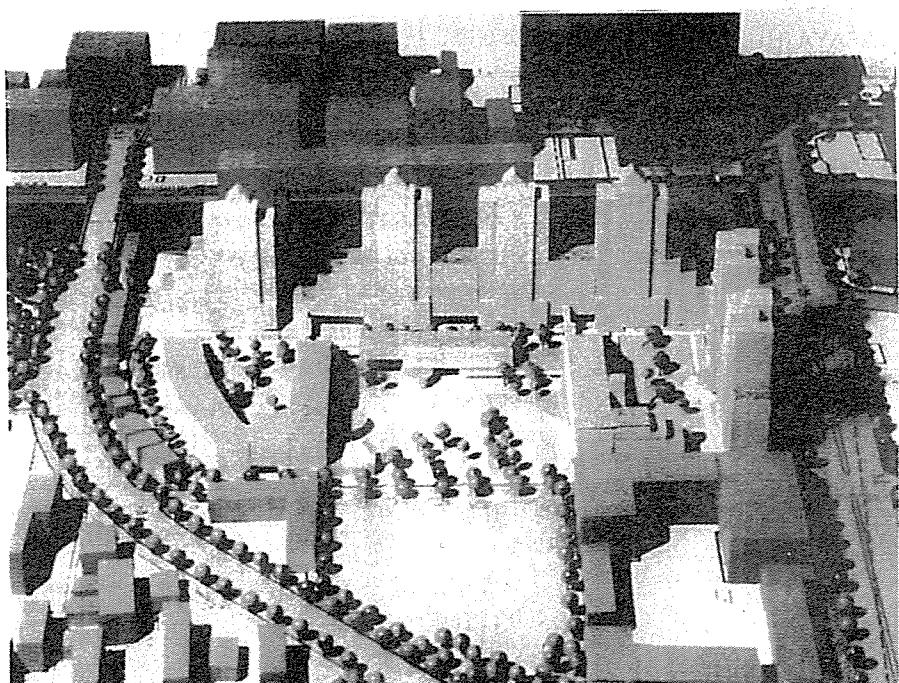
大小の如何を問わず、建築はすべからく<地の空間>との応答関係にあるのであり、建築は常に、発信される地の空間演出のシナリオに沿って、独自の立ち振る舞い方－建築表現－が求められているのである。

もし、そのシナリオが提示されていない場合は、つまり、都市デザインが欠落した街においては(日本の街では殆どがそのような状態にある。)、建築デザイン側が、市民の共感を呼ぶに足る個性的、魅力的なシナリオづくりを積極的に引受けける姿勢を示す必要があると私は考えている。その時は当然、建築士はその資質が問われることを覚悟しなければならないであろう。図一①

図一①

港南地区都営住宅建替計画

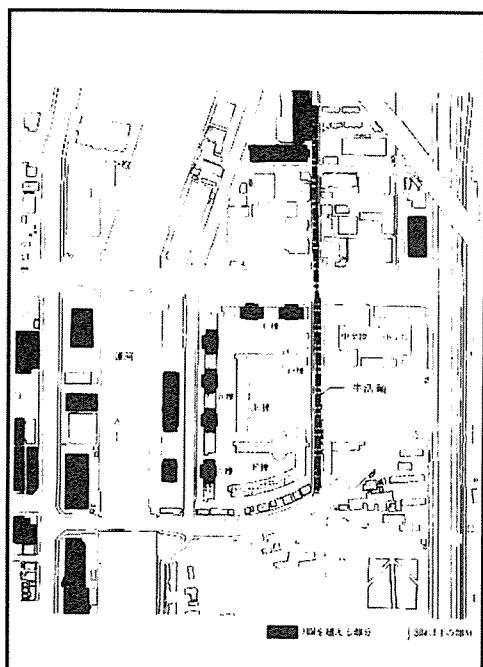
都心部の大規模都営住宅を新しい街として甦らせるために、周辺一帯の街の空間構造(地と図の関係)を読みとり、その構造との整合性を第一に、団地内の空地や住棟の構成のあり様を提案したプロジェクト。



図一①-1



図一①-2



図一①-3

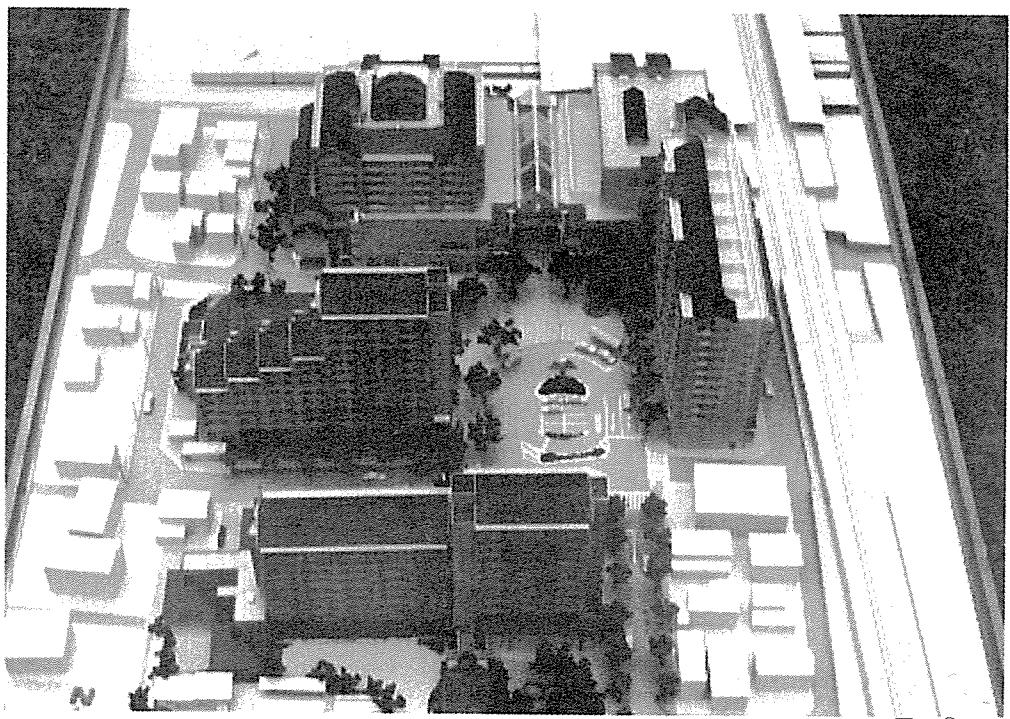
3. 空間の社会化—市民的空間の拡大—

魅力的街づくりに向けての都市デザイン戦略の第一は<空間の社会化>にあると私は考えている。

近代社会の都市空間は原則、公領域（街路、公園などの公共施設）と私領域（宅地）の2つの要素によって構成されている。そして、街を魅力的な空間として設えるには、なによりも先ず、市民が自由に享受できる公領域を出来るだけ量的に確保する必要があると私は考える。しかし、公領域の確保には経済的なバランスから考えても必ずしも限界がある。したがって、都市デザイン戦略としては、私領域の一部を、機能のあるいは、視覚的な意味で、準公領域と呼

びうる領域（ex 公開空地）に変容させ、実質的な市民的空間の拡大化を図る必要がある。

しかも、この市民的空間を、一般的な不特定市民のための抽象的公空間として捉えるのではなく、常に地域、地区、街区といったレベルで想定される、特定市民のための具体的公空間として捉える必要がある。言い換えれば、はじめに述べたようなく地の空間>を<社会化>してはじめて、市民的空間は個性的で活き活きとした公空間になるのである。そして、その<空間の社会化>は先の公領域と準公領域が意図的に、効果的に一体化されて始めて可能になると考えている。図一②

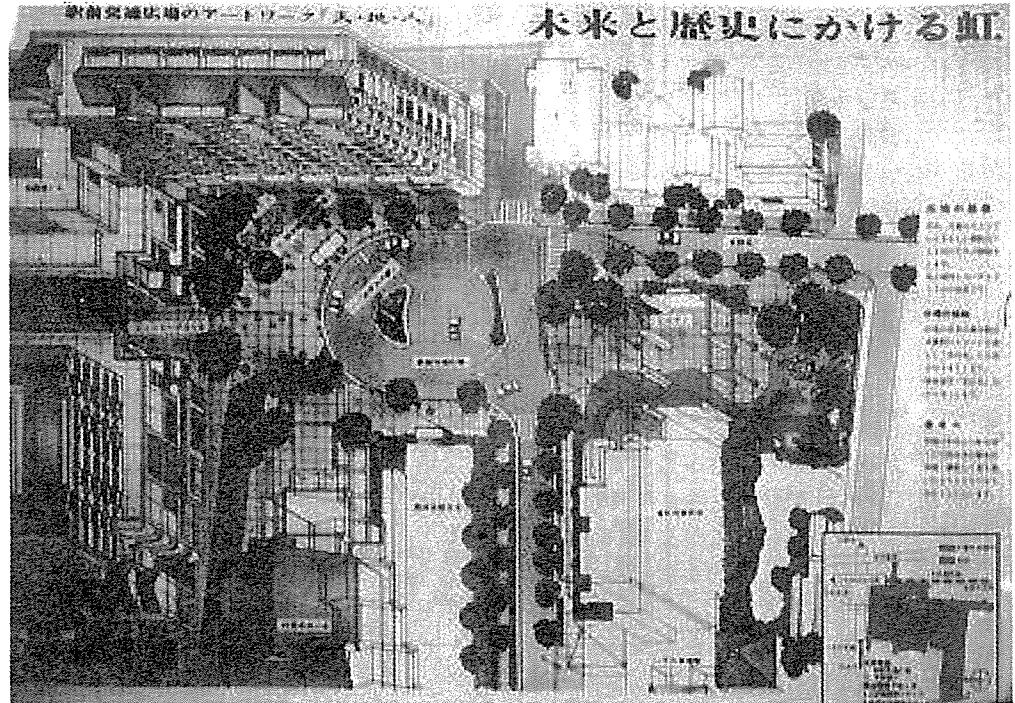


図一②-1

図一②

西国分寺駅周辺地区再開発計画

都市デザインの立場から新しい駅前広場の周辺に建設される再開発ビル。建替え都営住宅が公領域の広場に対して効果的な公開空地を提供すべく、誘導し、豊かな市民広場空間実現を狙ったプロジェクト。



図一②-2



図一②-3

4. 環境構造の発見

—市民的空間の構造化—

都市デザイン戦略の第二は、市民的空間として獲得した公空間をどう意図的に秩序づけ、どう構成するかのく理念と手法の開発>だと私は考えている。そして、その有効な戦略的概念として現在私は、く環境構造>なる概念を提起している。

く環境構造>とは端的に言えば、「地域固有の自然、歴史、社会から紡ぎ出される独特な地域生活文化を基本的なところで支えるために、発見的、構造的に抽出された公空間の総体。」ということになろうか。更に言えば、このく環境構造>は静態的なものと捉えるべきではなく、時間や建築活

動、生活者などとの関わりの中で、常に成熟し、変容していく、優れて動態的なものだと捉える必要がある。したがって、戦略的概念の表現としてはく環境構造化>と言った方がより適切なのかも知れない。

ところで、公空間づくりを構造的に捉えようとする狙いは何か。結論的に言えば、その狙いはく計画>という概念を、硬直化した近代的概念から解き放ち、現代的概念として捉え直すことがある。計画経済に代表されるように、く計画>という概念は優れて近代的、機能主義的概念である。

都市空間を住居、労働、余暇、交通の4つの機能として明確に捉え、その合理的な再構成によって、理想的な都市像が見定め

られるとした近代主義的都市計画には、<計画>というものに対する絶対的な信頼が読み取れる。計画づくりを担う計画者は、さしづめ神の手を代行する司祭者に見立てられているかのようである。

当然のことながら、現代社会を背景に考えるならば、凡てにわたって、合理的解決の名のもとに<計画>が介入し、凡てを仕立て上げてしまうという思い上った計画者の立場に私は立ちたくない。

例えば、公空間づくりにおいても、計画者は基本的なところだけに介入し、あとは時間軸の中で、生活者主体の空間づくりに

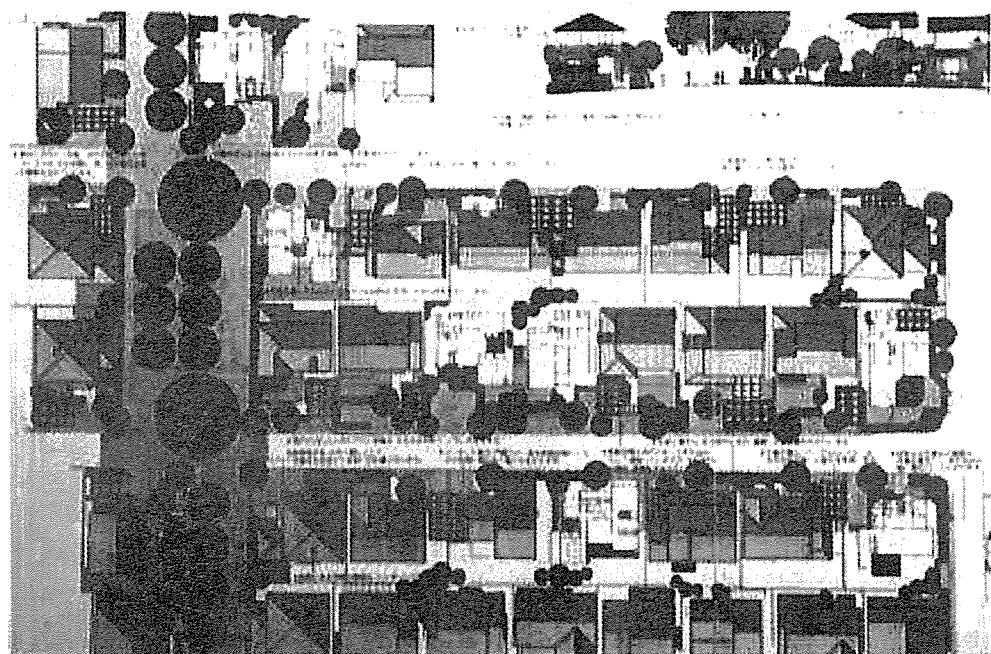
委ねるべきだと考えている。こうした公空間づくりのスタンスは、スケルトン・インフィルシステムによる集住空間づくりのスタンスと全く同種のものと言ってよく、そこでのスケルトンこそ、集住空間における<環境構造>なのである。

以上のように考えてくれば、<環境構造>とは、多様な生活者のニーズやアクティビティを最大限に導き出すために、ある読みのものとに仕掛けられた空間構造—<仕掛け>としての環境構造—と言ってもよいであろう。図一③

図一③

関西学園研究都市 光台団地

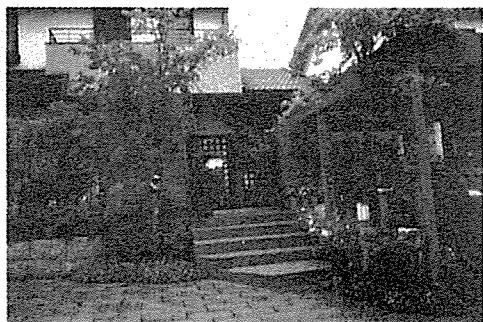
戸建住宅の景観誘導の立場から、オープン外構の手法で駐車場やフェンス、門扉などの整備を仕掛けとして工夫し、結果として見事な生活者参加の街なみ誘導を実現したプロジェクト。



図一③-2



図一③-2



図一③-3

したがって、<環境構造>はなによりも、地域の生活者が望む生活の基本的かたち—生活像—を的確に導き出し、支える骨格的な<公空間>として描き出す必要がある。

ここで、留意しておきたいことは、生活者が望む生活が、単なる個々の生活者が思い描く多様で移り気な個別的生活ではなく、地域の生活者が相互に触れ合うなかで、かたちづくられる社会的生活—コミュニティライフ—を意味していること。また、基本的かたちとしての生活像が、過去、

未来、幾世代の生活者の思いも視野に入れた、地域の全生活者の社会的総意としての生活像を意味していることである。

では、そのような<環境構造>をどのような具体的方法で描き出せばよいのか。先ず、社会的生活の基本をかたちづくっている地域固有の自然、歴史、暮らしに対する生活者側の共通の<こだわり>—生活価値観—を探ることから始めなければならない。地域の生活者が地域固有の自然や歴史にどう向き合い、どういう関わり合い方を望んでいるのか。地域の人々とどのような関わ

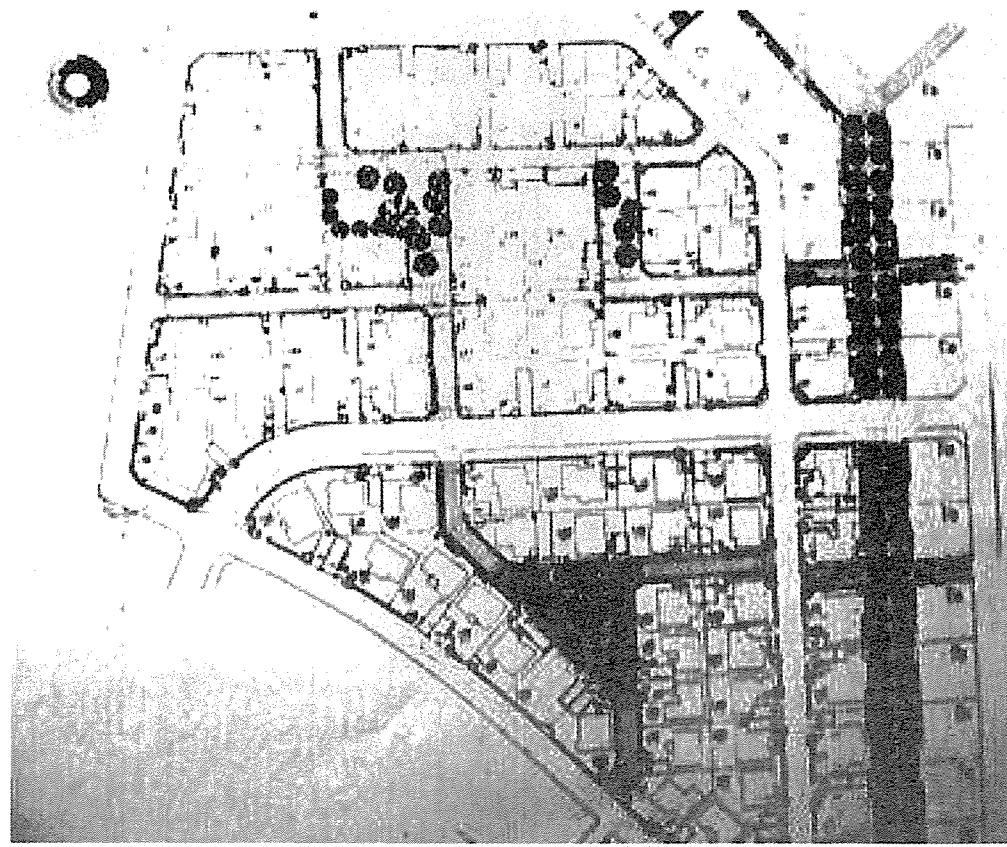
り合いの中で、どのような暮らし方を選択しようとしているのか。こうした生活者の総意としての具体的な「こだわり」を、徹底的に、かつ、正確に読み取る必要がある。次に、それらの「こだわり」をトータルに、かつ、もっとも効果的、持続的に支える「環境構造」のあり様を、地域固有の自然的、歴史的、社会的環境特性、言うなれば、地域固有の文化的環境特性に依拠して描き出すのである。

例えば、住まい環境の中での「環境構造」のあり様を思い描いてみよう。コミュニ

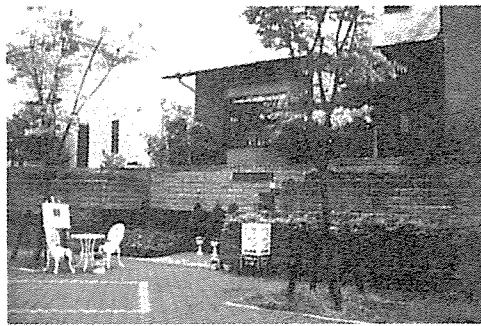
ティ地区の主要な生活軸となる街路、公園（公領域）を、地区の文化的環境特性と関係させながら、「環境構造」の主役として登場させる。そして、この生活軸の周りには、学校、保育園、ディサービス、店舗などといった多彩な脇役としてのコミュニティ施設（私領域）を、同じく先の環境特性との関係を意識しつつ、登場させ、配置する。地域における生活者のコミュニティライフを、しっかりと支える独特な「環境構造」の提起である。図一④

図一④

北摂N.T. ウッディタウン
戸建住宅地の良好なコミュニティ形成を目指し、公領域の街路構成のあり様まで踏み込んだ新たな住宅地造を提案したプロジェクト。



図一④-1



図一④-2



図一④-3

こうした事例からも明らかのように、「環境構造」のあり様にとって、「私領域」の建築デザインのはたす役割が如何に大きいかが判るであろう。「公領域」に対して「私領域」の建築がどう立ち振る舞うか、空地がどう開かれ、建築がどう構成されるのか、こうした建築デザインのあり様によって、否応なく「公空間」の質が決定的

な影響を受けるのである。

公空間の立場から発信する都市デザイン側の要請に対して、建築デザイン側がいかに適切に応答するかが、魅力的な街づくりにとってどれ程重要なかが判るであろう。

ところで、「環境構造」をめぐる以上のような議論を振り返るならば、「環境構造」というものが、計画者側の単なる恣意的

な判断で決して描かれるものではなく、その大筋はきわめて客観的判断の積み重ねの中で、自ずと見えてくるものだということが判るであろう。つまり、冒頭の表題に掲げたように「環境構造」とは、計画者が作為的に描き出すものではなく、「発見的」に描き出すものなのである。

5. 参加の手法の採用

一 「環境構造」発見の手続きとして

都市デザイン戦略の最後として私は「参加の手法の採用」を取り上げたい。

前項で、私は「環境構造」発見の手続きとして、計画者側は「地域固有の自然、歴史、暮らしに対する生活者側の共通の「こだわり」—生活価値観—を探ることから始めなければならない。」と述べた。しかし、実際問題として、計画者側の優れた能力と最前の努力をもってしても、特に暮らしに対する「こだわり」については、客観的データーをいくら積み上げても、到底解き明かすことは不可能であろう。結論的に言えば、「環境構造」発見の手続きとして、関係する市民あるいは住民の「参加の手法

」を採用する以外に、この問題を解決する途はないと言っている。

彼らが積極的に参加するワークショップ等の仕掛けを通して、彼らが共通に抱く「こだわり」の本質を計画者側が読み取る努力を払うのである。無論、彼らの「こだわり」は本来、様々な矛盾をはらんだものであり、必ずしも、ひとつに収斂するとは限らない。また、仮に収斂したとしても、それを単に計画者側がトレースすればよいというものでもないであろう。

計画者側は常に批判的立場に立って、その本質を見抜かなければならないのである。計画者側の資質が問われる所以である。

更に言えば、そもそも私の提起する「環境構造」とは、計画者側が彼らの「こだわり」の本質を凡て解き明かすことには出来ないという考え方から出発して構想されたものである。つまり、出来ないが故に、計画者は凡てを「計画」の手の内には入れないので、「計画」の介入するところを基本的なところ（構造的な部分）に止めるべきだと私は考えているのである。図一⑤

図一⑤

多摩N.T. ヴェルデ秋葉台

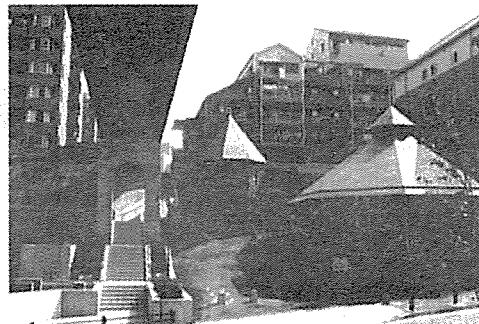
東京都住宅供給公社による
115世帯のコーポラティブ住宅。
外構整備や集会所のしつらえ等
を居住者参加方式によって決定。
住民合意の豊かな社会的生活空間づくりを実現したプロ
ジェクト。



図一⑤-1



図一⑤-2



図一⑤-3

建築デザインをからめ取った都市デザイン論をより発展、深化させるために私なりの切り口を通して、いくつかの問題提起を行ってきた。当然、尚、論じなければならぬ問題は多い。しかし、それらの積み残した問題については、より具体的なプロジェクトに則して、実践論的に論ずるしかないであろう。別の機会に譲り、改めて論じてみたい。

本稿を閉じるに当たって、最後に2つの点を指摘しておきたい。一つは、本文中に度々登場した「計画者側」の意味である。当然、それは都市デザインを担う専門家であろうという考え方が成り立つが、むしろ、私は、都市デザインの特質から考えて、「計画者側」の実態を都市デザインと他の分野（都市計画、土木、造園、建築）の専門家との連携集団—パートナーリンク—to

して捉えるべきだと考えている。

他のひとつは、そのパートナーリンクの中での、建築デザインを担う専門家（建築士）のはたす役割の重要性である。

特に、我国の街のほとんどが、都市デザイン不在の街であることを考えるならば、建築デザイン側からの都市デザイン的発想による提案が常に期待されていると考えるべきであろう。建築の立場から周辺の街の構造を読みとり、自らその構造に応答した建築の立ち振る舞い方を律することによって、具体的な都市デザインを実現する事が求められているのである。

これからの時代を担う「新しい建築士像」とは建築デザインと同時に、都市デザインの素養をもしっかりと持ち合わせた建築士ということになるであろう。（藤本昌也）

オープンビルディングの現状と展望

澤田誠二

SEIJI SAWADA

清水建設・技術研究所

国際建築研究情報会議・オープンビルディング部会・長期世界戦略担当

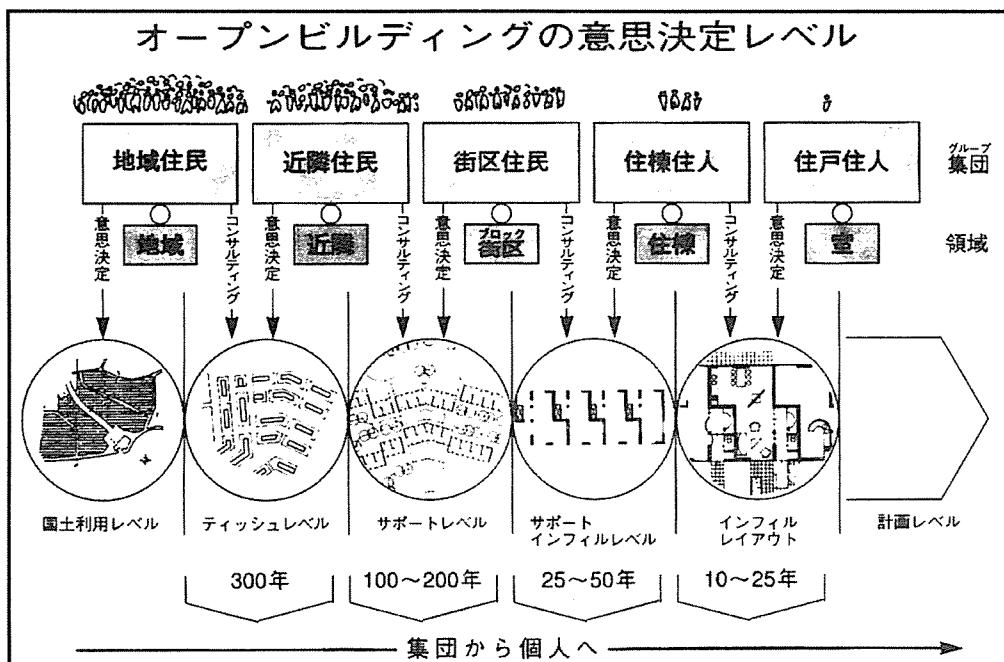
1. オープンビルディングは 本来「都市環境構成術」

オープンビルディングは、約30年前にオープンハウジングという呼び名で登場した。都市環境を「都市構造のレベル」「建物のレベル」そして「部屋のレベル」に区分してデザインし、建設する方式で、オランダのハブラー・ケンの提唱した方式である。当時は「大量住宅供給」の時代で、コンクリート大型パネル工法など工業生産システムの導入や規格型住戸を採用する「供給サイドのシステム整備」だった。その状況に「ユーザーの立場（需要側）」を重視し、それぞれ「アーバン・ティッシュ」「サポート」「インフィル」と名付けて3レベルに都市環境を区分し、そのデザインや建設・運営の意見を尊重する方式は、国際的にも極め

て新鮮だった。

このことは、「都市環境デザイン」に関する側から見ると、「環境のあり方」に関する議論を越えて「環境の構築方法」を含むのだから、オープンビルディングはいさか馴染みにくいかも知れない。オープンビルディングの議論には「建築生産」の問題が伴うからだ。

しかし「オープンビルディングとは何か?」と問われると、「公共」による「アーバン・ティッシュ」「共同」による「サポート」「私用」の「インフィル」という都市環境の「空間構成術」が基本だという点を忘れてはならない。このように考えると「都市環境デザイン」とも実は深く関わっているのだ。図一①



図一①
オープンビルディングの意思決定レベル

2. 建築工業化とオープンビルディング

筆者は60年代の終りにハブラー・ケンの理論や試行建設プロジェクトに接して以来、オランダばかりでなく各国のオープンビルディングの研究や実験をつぶさに見てきた。

我が国でも、「大量住宅供給」の時代には、工業生産を基にしながらユーザーの要求を取り入れられるフレキシブル集合住宅の開発の試みがあったし、現在でもそれは続けられている。住宅公団が行なったKEPプロジェクトがそうであるし、建設省のセンチュリー・ハウジング・システム、京大・巽研究室の提唱する「二段階供給」、最近では大阪ガスのNEXT21などがそれだ。オランダ、ドイツ、イギリス、フランス、イタリー、フィンランドなどヨーロッパを中心に研究と実験とが多数行なわれてきた。

この30年の間には、「建築産業」の構造的变化があった。「インフィル」と呼ぶ住宅のインテリアや設備の構成部材のはほとんどは工場生産されるようになった。部品産業が大きく成長した。

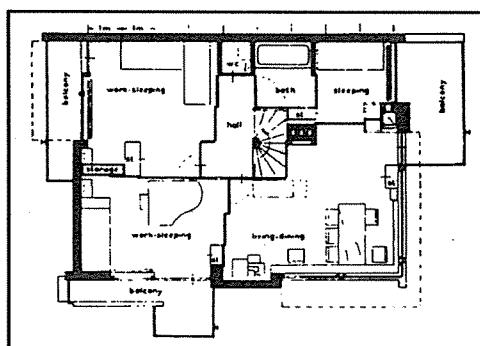
また、都市環境デザインの面でも、「サポート」と呼ぶ建物の基本構造については、この間に単に建物の個性を主張するのではなく「町並み」の一部としてデザインすべきだということになってきた。

しかし一方で、オープンビルディングは実験ばかりで大して普及していないという意見も聞かれる。先日も某大学でキャンパス再開発が議論された折り、私の友人は「オープンビルディングなんて前時代の遺物じゃないの？そんな理想論では全然話にならない。それは実験だけで消えていってしまったことからも明らかだ。」と言われたそうだ。彼は、オープンビルディングを研究し「要求条件の整理や実行組織の構成、あるいは長期に利用可能なフレキシブルな建物づくりにその考え方を利用してはどうか？」と提案したのに、そう言われたという。

たしかに、世界的に見て20年前頃は試行建設が随分行なわれたが、実務展開まで進んだものが少ないのである。それはバブル期に入ってオープンビルディングのような包括的イノベーションを行なわなくなったからだ。そんな面倒な努力をしなくてもビジネスが出来たから、一時下火になった。某大学の先生は、こうしたいきさつは知らないし、従って「参画型まちづくり」の道具として提案したという真意も、耳に入らなかつたのだろう。あるいは大学という社会の「極度の専門化」を示すエピソードなのかも知れない。

しかしバブル期が終わってから、オープンビルディングは著しく発展している。この「復活」もオランダが先鞭を付け、モデュールの法制化、「インフィル」の「パッケージ」化など進めた。従来は大工や配管・配線工が入り、壁や床・天井の仕上職人が入り乱れて1月半も掛かっていた「インフィル」工事が、一社が請け負って2週間で済ますほどになっている。工場生産部材を全面的に使用し、多能工3名で組み立ててしまうのだ。

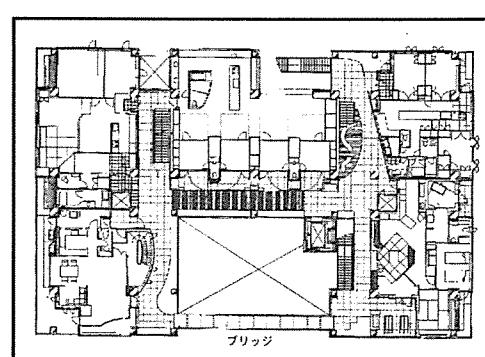
この「インフィル・パッケージ」産業の登場により、逆に「サポート」産業の姿も見えてくるようになってきた。さらにはデザイン、資材調達、建設を含めた建築産業全体が、サポート産業とインフィル産業とに再編成され、それらを調整・統合するものとしてのデザインやプロジェクト・マネージメントが行なわれる形が見えて来た。図一②



図一②-1 世界に先駆けたフレキシブル住宅



図一②-2 オランダのオープンビルディング

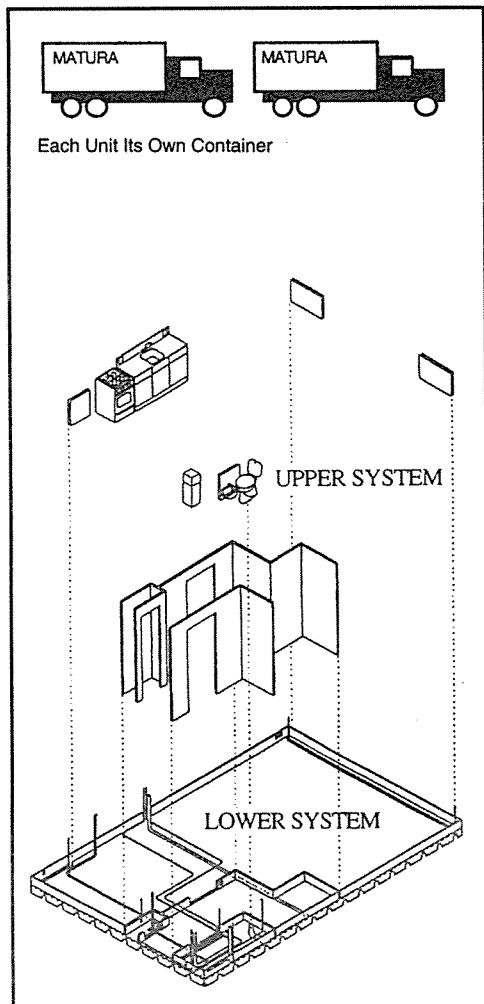


図一②-3 日本のオープンビルディング

3. 進行する建築産業のイノベーションと オープンビルディングに近い位置

この30年の間に、オープンビルディングは哲学と理論の提案に始まって、モデュラー・コーディネーションなどの設計方法、部品開発や工事ノウハウの開発と発展してきた。建築産業全体としても、企画や設計、部品生産や現場工事の方法は急速に進歩した。部品生産が工場化したばかりではなく、建設機械やロボットの導入が進み工事現場の様相も変化った。特に日本では、プレハブ住宅と超高層ビルとは新技術の発展した分野で、年産数10万戸もの住宅を生産し販売するプレハブ住宅会社が育ち世界的に注目され、超高層ビルに関して「現場の工場化」とも言える生産システムを発展させて来ている。

しかし、ここに来て建築産業は今までにない変わり目に差しかかっている。何と言っても市場そのものの縮小である。そのため今までの巨大市場に対応して肥大し切った建築産業も、その規模と構成との変革を迫られている。一方で、地球環境問題の面で、資源・エネルギー利用や廃棄物発生などを真剣に考えなければならなくなつて来ている。



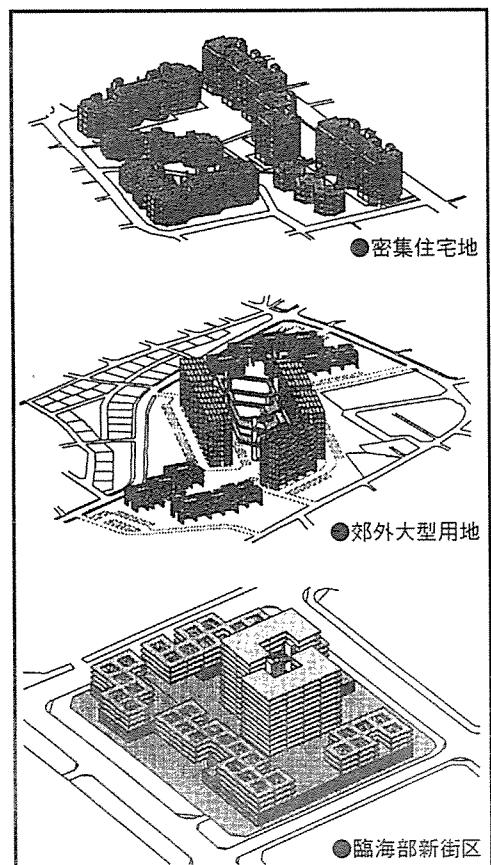
図一③-1 インフィルパッケージの例

この変化は、今までの生活の向上に合わせた建築の品質や生産性の向上などとは違う要因への対処なのだ。一口で言えば、建築のあり方と作り方とが「持続可能な社会の発展」に組み込まれざるを得なくなってきた。

この「持続可能な社会発展」への建設活動の対応は、先進国に限らず途上国を含めて大きな課題なのである。

資源消費の面だけでも見ても、我が国で言えば「スクラップ・アンド・ビルト」はもはや許されない。今までの「フロー型」のハウジング供給から「ストック型」供給の体制へと転換を迫られているのは誰もが承知していることだろう。

オープンビルディングのコンセプトは「持続可能な発展」との関わりでも有効なのだ。それは、「インフィル」部分を工場生産部品に置き換えるので資源の有効利用になるとか、現場で廃棄物が出にくいというだけではない。考えてみれば、「サポート」に対する投資は長期で回収するのだから、経済活動に連続性が出るのだ。一方で、数年の生活内容の変化に合わせて「インフィル」部分は変化すると考えられるから、これはこれで短いサイクルでの経済活動を形成することになり、この二つの組合せが「持続可能な経済活動」につながり、従って「持続可能な社会発展」を支えるということなのだ。図一③



図一③-2 モデルプラン全体パース

4. 都市環境デザイン活動

とオープンビルディング

さて、「都市環境デザイン」には、都市計画・設計、造園、建築デザイン、インダストリアル・デザインなど多様な分野である。とは言え、その関係者には、現在の建築や都市の建設ばかりでなくプランニングやデザインも含めた「建築産業」全体が変革期にあることは理解されているだろう。

こうした変革の中でオープンビルディングの効用が活かされるのはどのような分野であろうか？

「都市環境デザイン」との関わりでは、オープンビルディングの基本の「変わるもの」と「変わらないもの」の区分が何よりも大切だろう。具体的には「街並みを構成する（建物基本構造）サポート」のデザインの提案は今一番求められている。また「アーバン・ティッシュ」の領域に関してもオープンスペースや道路のあり方についての提案があり、また再点検の作業もある。さらに都市環境の利用を促すサインや屋外ファニチャーのあり方を考える際には、「変わるもの」だという観点が必要ではないか？

作成されたデザインを受けて「ハードウエア」を製作する「環境プロダクト」産業の側では技術革新や業務の情報化が進行しているので、その状況を理解し、成果を最大限に利用するという姿勢も不可欠であろう。

「都市環境」というものは、公共団体、地域コミュニティーそして個々の住民の意見と経済力とを反映して成立する。こうしたユーザーのニーズとポテンシャルを出発点にし、プランニングし、デザインし、資材を生産し、建設し、それを運営するという「広義の建築産業」は、これから時代、「環境の制約」を踏まえて「顧客満足」を達成するための新しい「産業」として発展して

いくはずである。

このように見ると、エンド・ユーザーの地域住民をとりまとめる「都市プランナー」や「コーディネーター」という立場が極めて重要である。殊に「参画型まちづくり」を進める「コーディネーター」は、誕生して20年近くになり、実績を持つ方も相当数に上っていると聞く。それでも、その多くは「コーディネーター」を務める個人のキャラクターに依存した形であり、未だにどのプロジェクトにも共通に使えるノウハウが無いようだ。

先にも述べた「広義の建築産業」が、その発展方向を明確にしつつあるのだから、「一般化」するに値するノウハウの成立を急がなければならぬし、新しい「建築産業」プロセスの一端を明確にする必要がある。この「需要サイド」の把握のノウハウが進歩すれば、様々な分野での「都市環境デザイン」も効果的に行なえることになる。

5. オープンビルディング展開の戦略：

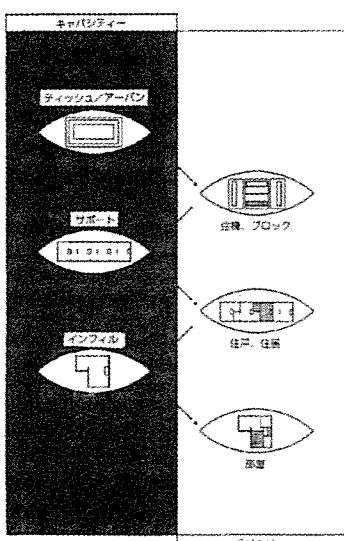
都市・住環境の総合リニューアル

オープンビルディングにその発端から関わってきた私は、今後我が国でこれを定着させ行く戦略として、住宅団地や都市のリニューアルが有効だと考えている。今まで進めてきた団地や都市の建設が今や「再開発」段階に入り来たことは周知の事実である。特に公団・公社の住宅団地の多くは建設後30年以上を迎えて、今までの台所や風呂部分だけの改修だけではない総合的リニューアルが求められている。居住者の高齢化に伴うエレベーターの必要性や、屋外施設の充実あるいは違ったデザインの造園も必要になっていると聞く。場合によっては、「団地」として田園に自律的に建設された環境も、その間の「母都市」側からのスプロールによって回りを囲まれ、「団地」側の「アーバン・ティッシュ」自体の修正を必要としているだろう。

戦後発展してきたこうした「都市環境」の「再生のデザイン」に当たっては、「既存のコミュニティー」の保存と「持続可能な発展」を第一に考えなければならない。

このような観点で取り組むことで、リニューアル・プロジェクトは、「公：アーバン・ティッシュ」、「共：サポート」そして「私：インフィル」という環境の3レベルを基本とするオープンビルディングにとっての現実を踏まえた訓練の場となるだろう。

こうした訓練によってさらに発展するだけのものが、オープンビルディングにはあると私は考えている。（澤田誠二）



図一④

「もつれた建築をほどく」より
オープンハウジングのすすめ
(財)住宅総合研究財団

歴史的環境の受容 と建築設計の関係 について

一たとえば丸の内にどのようなデザインの建物を建てればよいのか—

西村幸夫

YUKIO NISIMURA

東京大学教授

1. 具体例で語ろう

筆者に与えられたテーマはもっと抽象的なものであったが、観念論を振りかざしても都市は変わらない。具体的な事例をもとに語ることにしたい。このところ筆者は丸の内の景観問題にかかわっているので(ほかにも多くの地域に関わっているのだが、ひろく全国の会員の方に共通の話題として提供できるのは東京のことになってしまふ。地方の都市に想いを寄せるものとしては、残念だがしかたがない。そもそもこうした話題の構造自体、変革しなければならないのであるが)、丸の内を例にとって、建物を建てるとすると、どのようなことに配慮しなければならないかを考えることによって、歴史的環境と建築デザインの問題に迫ってみたい。

2. 建物の高さを取り上げる

例えは高さの問題を取り上げてみよう。丸の内では31mと100mというラインが既定の事実として存在しているが、これはどの程度遵守すればよいのだろうか。丸の内の歴史を振り返ると、一丁倫敦時代は軒高は50尺だったし、市街地建築物法施行後はご存じの通り最高高さは100尺だった。そして東京海上ビル以降100mが不文律として知られることになったのであるから、一貫して高さは高くなっているといえる。高さを揃える根拠はどこにあるといえるのだろうか。美観論争を引き起こした東京海上ビルにしても、日本建築学会編集の『総覧日本の建築』(第3巻、新建築社、1987年)では、「当初30階で構想されたものが宮城を見下ろすという理由で5階分もぎとられてしまい、建物頂部のデザインがあいまいとなった。・・・日本現代建築史上、惜しまれる経緯であった。」と解説されている。建築デザインは地域の景観に優先するといった熱い口吻が伝わってくる。はたしてこれでいいのか。

丸の内地区の地権者の集まりと東京都、千代田区ならびにJR東日本とで1996年に「大手町・丸の内・有楽町まちづくり懇談会」がスタートしている。同懇談会は対象地区の今後の都市再開発のあり方について1998年2月に「ゆるやかなガイドライン」をまとめ、「おおむね150m、拠点で200m程度」をスカイラインの基準として示している。これまでの経緯については「歴史的な31m(百尺)のスカイラインを表情線等として今度とも継承していく」と述べている。周囲にそろえ、それから上はセットバックしてタワーを立ち上げるという姿になるだろう。いわゆる墓石型

のスタイルである。問題はタワーのセットバックがどのくらいならばいいのか、タワーの高さはどこまで許されるかである。

3. 高さのシミュレーション

高さの上限は許される容積率から自動的に求められる。

現在丸の内地区の基準容積率はわが国都市計画法で定められた最高値の1000%である。ただし、丸の内地区を含む業務商業重点地区の場合、1997年4月以降、東京都の特定街区運用基準ならびに高度利用建築指定基準の変更によって一定の基準を満たすと従来の200%に100%容積率を上乗せし、最大300%までの緩和が可能となった。こうした条件の下、丸の内の標準的街区である1haの土地にオフィスビルを建てるとすると、許容される延べ床面積は13万平方メートルとなる。経営効率のいい基準階面積を3000平方メートルとして計算すると、31mの基壇部を持った建物の形態を想定して、基壇部の建蔽率が70%の場合、地上7階程度で容積の消化は約500%となる。残り800%を基準階3000平方メートルとすると高層部が約27階110mとなり、合計140m程度となる。高層部の基準階の床面積を上下することによってこの高さはかなりの程度変更可能であるが、いずれにしても従来の数値である100mの枠内には収まりきれない。

この値は「ゆるやかなガイドライン」が主張する「おおむね150m程度」と奇妙に一致している。もちろんこれは偶然の一一致であるわけではなく、容積別の形態シミュレーションがガイドラインの根拠となっているのである。

容積率300%のボーナスは高さにして約40mの上積みとなる。すなわち容積率100%ならば31m、100mのラインは何とか守れるが、1300%では遵守は所詮無理である。つまり、300%のボーナスが従来のスカイラインを破るように建物を誘導しているのである。

建築デザインは意匠の嗜好の問題である以前に社会経済的な磁場を前提としていることを銘記しなければならない。

100mという数字が出てきた背景には皇居新宮殿から見えないようにという理由付けがあったといわれているが、いずれにしても100mという数値が新しい丸の内の歴史となっていた。スカイラインから明らかにその歴史が読みとれるのであるとするなら、これを尊重しない理由はない。たとえば植民地建築が植民地であったこと

を理由に否定されるべきでないよう、
100mという数値もひとつの歴史として
否定されるべきではないのだ。

だとするとこの地区での300%ボーナスは基本的に不適切であるということになる。経済原則と都市景観とをバランスさせる解決策を模索しなければならないことを痛感させられる。

4. セットバックの考え方

次にセットバックについて考えてみよう。

セットバックは道路斜線のみならず、街路景観や圧迫感、基壇部分との関係などを考慮して設定される必要があるが、とりわけ歴史的地区の場合、ファサードの保存との関係が重要である。東京銀行集会所（1916年）や野村ビル（旧日清生命館、1932年）のファサード保存の評判がいまひとつなのは、新築部分のセットバックがほとんどないからだ。残されたのは表皮一枚であり、建物の実感がわからない。

一方、第一相互ビルをリノベーションしたDNタワー21（1995年）の場合、従来の歴史的建造物のイメージが現在も伝わってくるのは、セットバックを約50mほど十分にとり、前面の基壇部分をひとつの建物としてイメージできる構成になっていることがおおきい。それと背後のタワーのボリュームとが心地よいバランスを保っている点も見逃せない。

つまり、基壇部分を一個の建物として認知できる程度のセットバックをとることが、建物保存上も、街路のエッジを形成していく上でも重要であるといえる。その値は丸の内の場合、30-50mである。

こうしたセットバックや高さの考え方が建物の形態意匠を大枠で規定することになる。これが歴史的環境の受容から出発する建築設計の考え方だろう。

5. 建築意匠について

かつて、行幸通りをはさんで旧東京海上ビル（1918年）と旧日本郵船ビル（1925年）がともに高さ31mで揃って建ち、突き当たりに東京駅が見える風景は新しい東京のシンボルとして絵葉書に恰好の題材を提供していた。また、戦争による中断があるとはいえ、丸ビル（1923年）と新丸ビル（1952年）とが29年の歳月の末に、デザインのうえでも対をなす形で完成したという事実は地区の文脈のもとにある建築意匠のねばり強い努力の成果である。

現在の東京海上ビルが美観論争を巻き起

こし、その結果に賛否両論あるのは先の引用が示すとおりである。しかし、のちに向かい側の日本郵船ビルも建て替えられ、両者は高さもボリュームもデザインもばらばらの相互に無縁な建物になってしまった。この事実を目の当たりにすると、建築単体の評価以前の問題に行き着かざるを得ない。今日、行幸通りの皇居外苑側に立つと、ふたつの建築のあいだには対称性が決定的に欠如している。お世辞にも整った街路景観とは言えない。地域の歴史的環境を尊重して両者がそれぞれに建築意匠を検討していれば、もうすこし調和がはかられていたはずである。先の『総覧』の筆者にはこうした視点が欠けている。

そして今回の丸ビル騒ぎである。

新しい丸ビルは地上37階、高さ183mだと発表されている。これも「ゆるやかなガイドライン」は拠点地区の高さを「おおむね200m程度」と表記しているので、この建物は範囲内であるといえる。高さを別にして建築意匠だけを取り上げたとしても、そもそも丸ビルの解体が改築計画の公表前に実施されたことは問題である。丸ビルを壊して新規に過去を上回る建物を提案するのか、部分改築でいかか、それとも保存して床面積は他のビルで実現するかといった判断は新しい建築計画との比較考量の中で検討されるべきであった。比較考量の際には貸しビルという事業上の判断だけでなく、新旧建物の意匠の比較、都市景観や建物の文化財的な価値、周辺建物との調和といった観点からも議論されるべきであろう。そして最終判断はひろく市民の声を聞いたあとで、アカウンタブルな形でなされるべきである。こうした中で、建物の意匠の是非が議論となるべきである。これが歴史的環境を前提として建物のデザインを論じる方法であると思う。

同様のことは現時点で破壊の危機にさらされている日本工業俱楽部ビルについてもまったくそのままあてはまる。

もしも現行制度や経費負担が選ばるべき最善策の妨げになるというのであれば、制度そのものを柔軟に見直し、経済的な支援策を積極的に導入することも必要になってくるかもしれない。そうした見直しに関して行政は最大限の努力をしなければならない。それを後押しするのが世論であり、こうした強い世論の声は新旧建物の意匠の比較といった具体的な議論の中で鍛えられてくるはずのものなのだ。

建築意匠にはその時代その時代の様々な実験や問題提起があってもいい。ただし、個体の建築物が置かれる環境はふたつとな

函館と小樽 住民の手の届く環境とまちづくりエネルギー

柳田良造
RYOUZOU YANAGIDA
建築家／柳田石塚建築設計事務所

い地域の文脈の中にある。その文脈を読みとて新たな形態を提案しない限り、地域の風景は決して洗練されていかない。丸の

1. まちづくりにおける調停機能

地域で、まちづくりが進展し、成果が生まれるところまでいくのは単純なプロセスではない。場ができる、主体形成がはかられ、まちの像が可能性として共有化され、関係性が生じ、調停機能が働き、成果が生まれる。一つ一つのサイクルが螺旋状に動きながら、展開していく。そのプロセスは協同的、建設的であるとはかぎらない。時には対抗的、独善的、猜疑的であり、多様な主体が関わる動的な過程であるだけに、さまざまな葛藤、紛争を生じる。まちづくりは、葛藤や紛争、緊張関係を本質的に含んだプロセスである。しかしそれらの葛藤を契機として地域で大きなまちづくりエネルギーが育っていく可能性がある。

対立、葛藤、紛争に対し、地域でなんらかの調停機能が働き、その処理を当事者自らが取り扱っていくことが重要である。そのことを背負い解決することで、はじめて地域は多様で生き生きとした、豊かな環境を手にいれることができるし、地域が生き延びていく力を獲得することもできるのである。葛藤が解決されていく条件としては、ある種の精神的なゆとりや遊びころ、余裕も必要である。ゆとりや遊びころがあれば、葛藤にたいしてある種の下支えを提供し、抜き差しならぬ対立までエスカレートすることは少なくなる。まちづくりにおける調停の仕組みとは「妥協や補償」だけではなく、環境、他者との関係のなかでそれが「自己実現」の方向をさぐることが基本となる。

地域での問題解決や活動グループの紛争の自己処理過程をとおして、結果として行政と市民の間だけではなく、様々な活動諸力との間に非制度的なパートナーシップが生まれ、さまざまな力をを集め既存方法では解決できない地域の問題を解決していくところにまちづくりの意味がある。パートナーシップは制度化されたものや完成した仕組みとしてあるのではない、結果としてまちづくり過程の結果としてうみだされてくるものである。パートナーシップは参加を含みながらも、対等な関係を前提に、市民、行政、等諸力が共同して地域のまちづくり課題に取り組む非制度的、状況的な関係である。とくに地域がかかえる重大な問題、地域の諸力を結集しなければ解決できない課題に取り組む時、パートナーシップは社会性を獲得するといえよう。

内でいま、幸か不幸かそのことが実証されようとしているのである。(西村幸夫)

函館と小樽は衰退した中心市街地、歴史的環境の再生を、紛争や対立を含む長いまちづくりの過程とともに進めてきた歴史をもつ。ここでは二つの都市の経験についてレポートしてみたい。

2. 函館：住民の手の届く環境

函館は津軽海峡に突き出された函館山、それを要として扇のように広がる市街地と巴型の港が街の骨格をつくる。函館山の北麓一帯にひろがる西部地区は、江戸末期に開港場として開かれ、戦前までは函館の都心としてにぎわい、洋風文化の伝統を今に伝える街並みを残し、中でも1階が和風、2階がペンキでカラフルに塗られた和洋折衷様式の町家群は函館独特のスタイルとなっている。港や坂道に沿ったその街並みは歩いて楽しく市民や観光客に親しまれているが、20年ほど前は都心の移転や地区的産業衰退により開発から取り残された地区であった。その保全・再生のまちづくりは、市民側の問題提起とそれを受けた行政側の施策が対抗しながらも相補的な役割を果たし、都市空間の整備や景観条例などまちづくりのルールを創りあげてきた背景がある。

地区が注目され始めるのは1970年代中頃、若いオーナーによるレストランや喫茶店、マンションなど歴史的建物の商業的再利用が港近くや坂道沿いに誕生した頃からである。個々の例はいずれも創意工夫にとんで、魅力的な小スペースをつくりだし、人気を集めた。83年には地域の若者グループが事業主体となり、大規模なレンガ造建物の商業的再利用を展開した。このあたりから行政側も地区の観光価値に気づき始め、地区を散策する路の整備にとりかかる。坂道の石畳舗装や街灯を整備していくが、自前の小規模な予算しかない時代で、毎年1街区づつ進めるというものであった。しかしすこしづつ小規模に整備していくことは街並みに対し、結果として好影響を及ぼすことになった。長い間放置されていた歴史的な建物が、前面の路の石畳整備をきっかけとして、所有者の自主的な判断によって、すこしづつ修理や修復がなされていったからである。

街並みの改善と路の整備がすこしづつ進んでいる中、88年は様々な意味で西部地区的街並み保存が転機となった年である。この年の青函博を契機に地区への投資が活

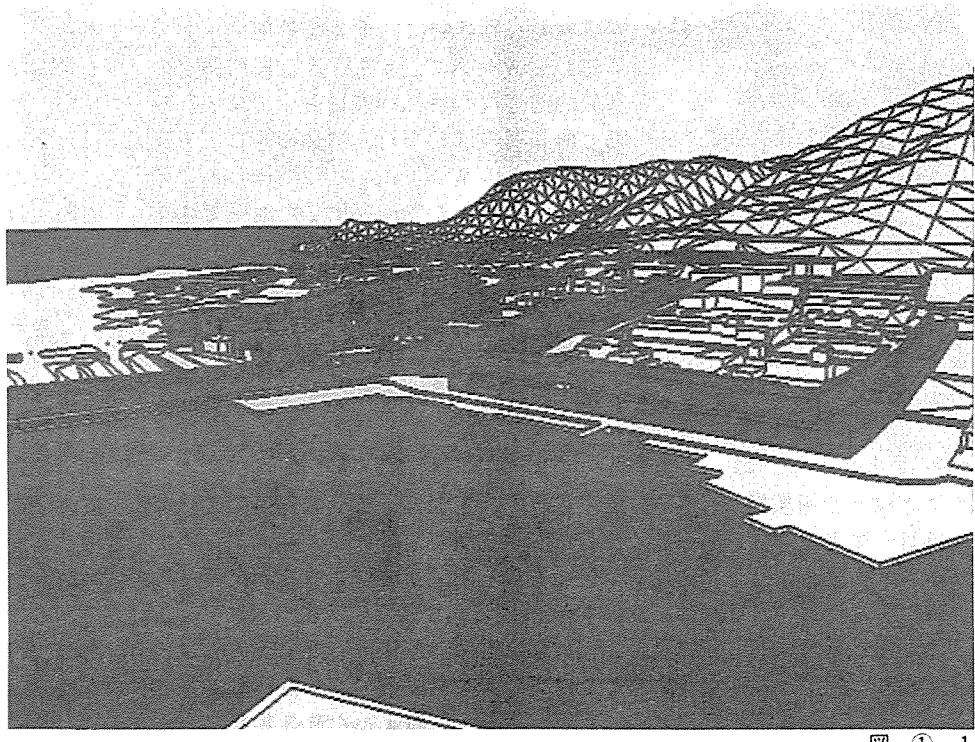
発化し、ウォーターフロントの倉庫群の大規模な商業的再利用などがオープンする。

西部地区の街並みが函館山の夜景や五稜郭などと並ぶ観光拠点として定着し、函館への観光入り込み客数も年間500万人を超える規模となる。さらにバブル期のリゾートマンションブームが函館に押し寄せ、歴史的な街並みや函館山山麓には、高層マンションが景観条例制定前の駆け込み申請の例も含め、それこそ雨後の筈のように計画されることになる。こういうなかで景観条例がこの年施行される。この88年からの数年間は西部地区に景観をめぐる様々な問題がまき起こった。地区の外部か

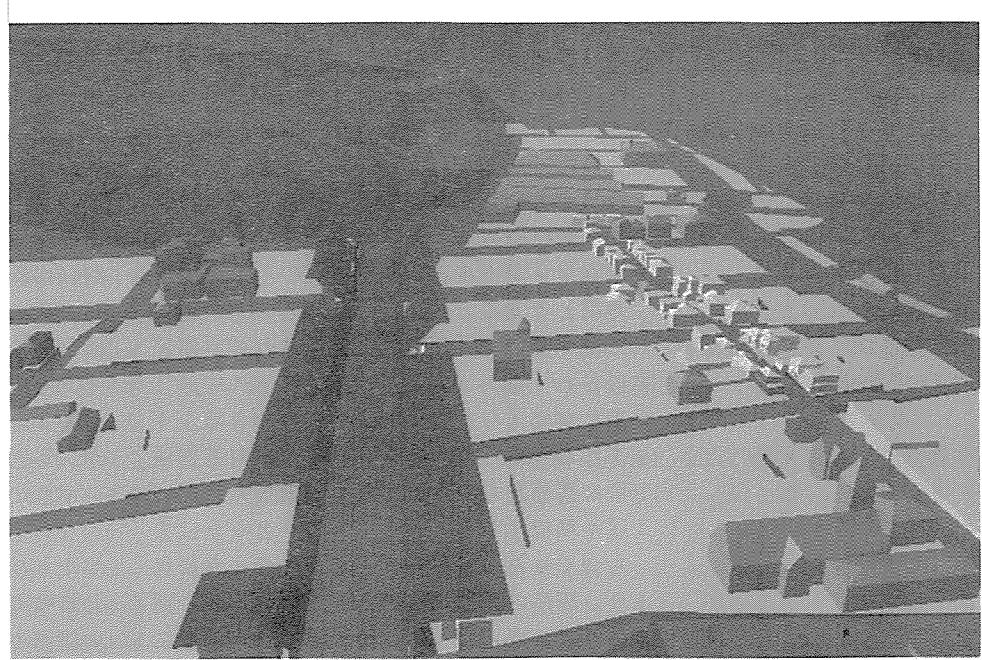
らのリゾートマンション計画に対しては、地域住民の幅の広い住民の反対の声が上がり、一方地区の中でも、景観条例のそもそもの意味や基準の問題、商業的再利用を進める上では新たな制限になる規制の内容等について、個別にさまざまなケースで行政や市民を巻き込んで、論議がまき起こった。指定建築物の無届け解体や条例違反の建物などの例も生じた。一方暮らしの中で改めて歴史的な建物の意味を問う、市民グループによる街並み色彩研究の活動なども始まった。

混乱の数年間、西部地区では数えきれないほどの論議がなされた。その過程で予想

図一①
函館歴史地区の「景観形成面」



図一①-1



図一①-2

もしなかったようなパートナーシップも成立した。住民、市民グループ、専門家、マスコミ、行政、議会など、地域の力を結集して、問題の解決に取り組むんだ時期といえよう。

眺望などの景観破壊を引き起こし、人が定住せずコミュニティづくりにつながらないなどの理由から、リゾートマンション計画にはまず地元から幅の広い住民の反対の声が上がった。そこへ従来から景観条例制定の運動などを進めていた市民グループが支援活動を行い、行政側も従来の枠をこえて取り組み、さらに議会でも全会一致で反対決議を行い、最後は市長も乗り出してデベロッパーと直接交渉するという共同戦線が成立し、最終的には重要な景観ゾーンでは建設をストップさせた。また民間所有の歴史的建造物の解体危機においては、行政側と所有者の深刻な対立関係の中に、市民運動がまちの Watch dog として加わることにより、問題をより社会化した地平で考える状況をうみ出し、代替案を検討し、問題解決の方向をつくり出した。

一連の過程は行政側の学習機会ともなった。景観関係の公共事業で複数代案の検討や市民提案の要請とそれに基づく計画変更などのケースも生まれた。また景観施策もきめの細かい保全策を進めることになるが、その中の景観ガイドラインには、地域の建物の高さ制限だけでなく、主要な場所からの眺望や見通しの確保のため主要な道沿いに、ビジュアルコリドーのようなユニークな景観保全面の考え方も導入されることになる。主要な問題が解決され、バブルをめぐる動きも収まった93年頃には景観問題関連の議論も落ち着いてくる。これらの論議の過程というのは、街並み保存のルールが地域に根付く時間でもあったといえるであろう。

都市活動を行う中には様々な価値観をもつ様々な人々がいる。地域の環境に対して地域と異なるシンボル的意味をとらえ、例えば、経済的なチャンスとみなす、あるいは別なシンボル、企業や個人の主張の実現の場と考える。そしてそれらの力が地域に様々に働く。その力が大きければ、住民にとっては外からの得体のしれない力で、まちが変えられていく、そういう意識が生まれるであろう。そういう状況に対し、住民が自分たちの住むまちを自分たちの手の届く環境としてとらえられるかどうかはまちづくりにとって大変大きな条件のように思う。函館の西部地区の街並みが、バブル期に外部の資本による高層マンション建設により大きな改変を受けようとした時、立ち

上がった地域の様々な主体、その共通の思いは地域の環境や風景を、「市民の手の届くところのもの」として、見えない外部の力から守れの思いであった。

3. 小樽：まちづくりエネルギー

まちづくりにおける「像」とは地域のまちづくりエネルギーを凝集できる対象で、物的環境のあるべき姿を示したものといえる。「場」は地域のまちづくりエネルギーを発生、共有、増幅させる社会的環境で、人と人の関係で成立するものである。函館と比べると、小樽のこの四半世紀のまちづくりの動きは圧倒的にドラスティックで、大変なまちづくりエネルギーを感じるものである。

1970年頃には戦前「北海道のウォール街」と呼ばれた小樽の都市銀行の各支店はほとんどすべて札幌に移転し、カタッポになったかっての業務街色内通りや小樽運河周辺はゴーストタウンのようになる。その後埋め立て問題をきっかけに小樽運河保存の市民運動が起り、斜陽都市からの再生をめざしたまちづくり運動として展開する過程は、改めて言うまでもない。結果は道路計画を一部変更して、小樽運河を残すことになり、かなり姿は変わったが、周辺の歴史的街並みと合わせ、その後商業的な再開発が進むことになる。石造倉庫の再利用や運河地区への投資が始まるのは、運動も終結し、道路が完成した87年以降のことである。丁度バブル期の観光ブームとも重なり、小樽の歴史地区の活性化が文字どおり堰を切ったように猛烈な勢いで進む。小樽はそれまで観光都市としての経験がほとんどない状態であったが、運河や石造倉庫は突然全国区の観光スポットとして注目を集め、商業的利用のため市外から資本の投資が殺到する。ガラス、レトロ、オルゴール、グルメなど時代にフィットしたキーワードが次々と打ち出され、ゴーストタウンのようであった街並みが、ショップや土産物、ホテルや飲食店街に変わり、狭い道路には観光客と車があふれた。92年には観光入り込み客数も500万人を超える、函館と肩を並べる観光地となる。斜陽小樽のイメージは大きく変わる。

運河論争が閉幕して十年の時間がたつが、現在の街は当時の保存派、道路開発派、いずれの想像を超えた小樽の街の姿かもしれない。保存派から見れば、運河が市民の集まり憩う場ではなく観光客に占領されたしまった姿や、歴史的街並みのあわただしい雑踏や土産物店の立ち並ぶ姿は、想像を超えたことであったろう。また道路開発派

から見れば、運河や街並みがこれほどの集客価値をもつとは予想をこえたことであつたし、港湾道路や幹線沿いを土産袋さげた観光客がぞろぞろと歩く姿は想像できなかつたことであろう。まちづくりは時代の流れを背景に、地域に住む様々な人間が登場し、演ずるドラマである。時代の価値観や課題によって、登場する人物が交代し

様々な劇が演じられていく。小樽のまちづくり劇は、運河論争の第一幕が保存派、道路開発派の対決であったとするならば、その後のまちの変貌劇の第二幕は商業派のひとり舞台のようである。

運河の変貌当初はあまりの急激な開発と観光化のため、街の未整備や混乱、行き過



図一① 小樽運河の現況

ぎのアンバランスな状況が続き、ブームも一過性のものかと心配された。しかしその後も不況にかかわらず、観光客の数は減らずリピーターも増え続けている。なにより地区には常にエネルギーがあふれ、新しい店やスペースがつぎつぎとオープンし、来るものを楽しませる力がみなぎっている。

運河や歴史地区の整備も進み、ここ2、3年で地区の都市空間の質も向上した。また運河地区のエネルギーは街の中心部にも波及し、商店街なども以前とくらべてはるかに元気になった。小樽の市民の自信回復にもつながった。

この大きな小樽のまちづくりや改造のエネルギーは一体どこから生み出されたものであろうか。確かに開発がブームを呼び、時代の流れも後押ししている面は大きいが、しかし大半のエネルギーは運河論争の十数年間に蓄積された地下のまちづくりエネルギーのような気がするのである。論争自体は最後まで対立が続き、政治問題ともなり、その結果10年以上の間運河の環境は全く整備されなかつた。しかしその分運河論争の水面下では、大地震が地下でエネルギーを蓄積するように、その後まちづくりを進める大きなエネルギーが蓄積されていったのである。貯められたエネルギーはその後

一気に放出される。小樽運河とういうく像>に結集したまちづくりエネルギーは運河が一部変わってしまったことなど、はるかに飛び越えて、奔流のように溢れでていくのである。

まちづくりエネルギーを蓄積する要因は運動過程に様々に用意されていた。1978年運河や港に共感を寄せる祭り好きの小樽の若者達が、将来の夢を具現化するために運河を舞台に手づくりの祭り、ポートフェスティバルを行つた。運河沿いには何十店もの市民の手作りの出店が並び、運河に浮かぶはしけや港の空き地ではロックコンサートが、運河沿いの石造倉庫もはじめて開放され、シンポジウムやジャズコンサートの場となつた。20年後の現在、レストランやショップに数え切れないほど再利用されている運河沿いのなどの石造倉庫再生の出発点となつた試みであり、祭りは2日間で延べ20万人以上の人を集めた。

運河に圧倒的な人が集まるこれを実現化したこの祭りは、一瞬とはいえ「保存か道路開発か」の対立を忘れさせる開放感を、運河に集つた人々にかいま見させた。その反響も大きく、以後小樽運河問題は一層全国的にも注目されるようになる。道路開発派も運河や石造倉庫の「価値」や「可能

性」を認めざるをえなくなり、運河の全面埋め立てから、一部水面を残す現計画への変更につながっていく端緒となったのである。こういう環境学習型イベントは、ポートフェスティバル以外にも小樽運河研究講座など、運動のなかに多彩に繰り広げられていったが、その中にその後の展開を生み出すまちづくりのエネルギーが蓄積されていったのである。

長く続いた衰退の時代から小樽というまちは姿を大きく変えた。そのなかでも商都小樽と小樽商人は、卸売りや金融、流通で失った力を、運河観光を手がかりに、再生の糸口を見いだしつつあるのかもしれない。現在、中心商店街から離れた港の旧鉄道ヤードには、北海道でも最大の商業コンプレックスの建設が進められようとしている。今後小樽のまち、特に中心市街地は激しい変化にされされることになろう。運河論争後、主だったまちづくりの争点や活動がなかった市民まちづくりの動きも、市民グループや商店街が手を結び、新たな小樽のまちづくりの方向を模索し始めたと聞く。これから的小樽のまちづくりの第三幕こそは多様な人物が登場し、共通の場を介した議論やパートナーシップが成立して協同性に支えられたまちづくり劇が成立することを期待したい。

4. 生きられた風景

函館西部地区の魅力は、なによりも生活感のある歴史的街並みである。それは観光用の見せ物のような街はない暮らしのにおいである。生活感は幅広い層の住民がいてこそ、かもし出される。しかしその幅広い住民は、この20年間で51、943人（1975年）から29、145人（1995年）に、ほとんど半減した。地区的高齢化率も23、9%と、市内のなかでも飛び抜けて高く、現在地区住民の4人にひとりは65才以上の老人である。建物の老朽化、空き家や空地の増加、さらに地元商店街の不振など、かかる問題が多い。20年前と比較すると、街並み保存のルールは地域に根付き、主要な街路や広場は石畳に整備され、歴史的な建物は修復が進み、地区的街並み景観は十分に整備されたのだが、居住地として地区的コミュニティは衰退し、いまやあやうい状態となったのである。この間の日本の都市の、中心市街地の空洞化の流れから、函館西部地区ものがれることはできなかつたのである。

西部地区は住宅地としてのイメージがよく、魅力的な公園や図書館、博物館、病院などの公共施設も多く、地域全体が文化ゾーンの印象がある。ここに住みたいとい

う人は昔から多く、いまも人気は高い。バブル期のリゾートマンションブームもその証左のひとつであろう。もともとこの地区的住宅形式にはお屋敷型と上下和洋折衷様式の建物や長屋という町家型の二つのタイプがあった。函館の歴史的環境の保存が言われだした頃から、住宅地としての機能を保持するため幅広い住民の住める住宅を再建することの重要性は指摘されてきたし、町家型住宅の再建や共同建て替えなどの構想もつくられている。ニーズがありながら、実際はこの地区的住環境整備は進まず、長屋などの狭小老朽化した住宅からはどんどん人口が流出していった。その原因として小さな敷地割りや複雑な地権者の問題から、個別の建て替え更新が難しかった面と公的な住宅政策として施策が立てられなかったこととともに、この地区的環境にあった住宅形式の開発がなされなかつたことが挙げられよう。

しかしうやく地区にも新しい風「西部地区に住まうための試み」が吹きはじめてきた。今年弥生町で建設が進む新しい形態の市営住宅や、「函館からトラスト」の助成をうけて地元の住民や建築家達が進めているコーポラティブ住宅づくりの動きが、西部地区の住環境再生のきっかけになるのではないかと期待されているからである。そのデザインには坂道や直行する平坦な路、路地という地区の街路のヒエラルキー、高さや幅などの建物のスケールやスカイライン、隣との関係やパブリックなスペースへの視線、港や函館山への眺望という西部地区の環境で暮らす住居のための要素や視点が考えられはじめている。

風景を通して、市民が街のありようや変化を感じとり、日々の暮らしから街への思いをめぐらす。そこでは、街の風景の変貌は敏感に市民の日常生活での変化につながる。函館西部地区にはまだ、市民が街の風景とともに暮らす生活が存在している。新しい形態の市営住宅のデザインにも市民はビビッドに反応している。

20年前、衰退した歴史的環境の中に若い人達の手で地区にあかりを灯すように歴建再利用の店がポツリ、ポツリと誕生し、それをきっかけに、点が線につながり、線が面として街並みの整備が進んでいったようすに、今うまれつつある新しい形式の住宅づくりは、地区のなかに拡がっていくだろうか。20年の時間がまた必要となるだろうか。西部地区の住環境の再生が今後も函館の市民、行政のパートナーシップが機能しつつ、進んでいくことを祈ってならない。（柳田良造）

京都「ポンデザール計画」の顛末

清水 泰博
KIYOMIZU YASUHIRO
広報・出版委員
SESTA DESIGN

京都における「ポンデザール計画」については去年の11月号・京都特集の寸評欄で取り上げたので、記憶しておられる方もあるかと思う。またこの計画の結末については既に新聞発表等で御存知の方もあるかと思うが、表面的には急転直下といったよう8月6日に白紙撤回された。都市計画決定がなされ、予算までついていた工事計画がこの段階で中止となることは全国の自治体でも前代未聞のことであろう。そこでこれまでの経過に若干の解説を加えながらレポートしてみる。（経緯については新聞記事の発表を中心に多少解説を加えるとした。）

80年 3月 京都市総合都市交通施設整備事業 調査報告書で鴨川歩道橋の必要性を提言。

93年 3月 新京都市基本計画に鴨川歩道橋の整備を位置付け。

96年11月 フランスのシラク大統領（元パリ市長）の提案を受け、榎本頼兼市長が、「日本におけるフランス年」と、パリ市と京都市の「友情盟約締結40周年」を記念して、パリのポン・デ・ザール（芸術橋）をデザインした歩道橋を鴨川の三条一四条間に架ける構想を打ち出す。

97年 2月 京都市が99年度の完成を目指した建設計画を発表。97年度予算案に調査費を計上。

同年 7月 市民団体などが計画反対を申し入れ。これ以降、相次ぐ。

同年 8月 美観風致審議会景観専門小委員会で、橋の基本構想がおおむね了承される。

鴨川歩道橋のイメージ図を作成。建設に向けて都市計画案の公告・縦覧を開始。

同年 9月 公告・縦覧が終了し、市民からデザインなど意見書が約1740件寄せられる。

この数は景観論争を呼んだ京都駅ビルのときの約11倍。発表直後に行われた縦覧にもかかわらず市民の関心が非常に高いことを示した。

同年10月 市が縦覧結果を公表。要望付を含め賛成意見は72%、反対26%。

京都市都市計画審議会、京都府都市計画地方審議会が相次ぎ、建設のための都市計画変更を承認。

市が都市計画決定し、告示。98年7月着工を目指す。

市は縦覧に訪れた人の数が多かったことから市民の意見を十分に聞いたとし、また

その中で肯定的意見が多かったことをあげて、市民は賛成であるとした。だがこの折、架橋賛成派をまとめる為に組織的な動きがあったとも言われた。確かにその後のいくつかの民間のアンケート調査でも賛成派と反対派の比率は逆転している。そして様々な市民団体より反対の声明や意見書が市に對して出され、新聞報道も京都市では連日のように行われた。パリでもル・モンド紙が9月10日付一面で架橋批判記事をのせた

（その後10月10日、10月17日）。その後も続々と市民団体、専門家団体等が結成され続けてきた。（JUDIも関西ブロックが会員88人中86人の反対の意見書を京都市に提出した。）

またこのころ賛成反対を問う為の様々なシンポジウム、集会が行われるが、呼びかけにもかかわらず賛成を表明する人が現れるのは稀で、京都市の行政側の人が現れるることはまずなかった。その為そのいずれもが反対者多数の決起集会の様相を呈してしまった。

同年11月 市が橋の欄干など上部のデザイン3案を公表し、市民にアンケート調査を実施。

京都市は橋高欄およびベンチ等のデザインを市民にゆだねるとの考えであったが、このアンケートでは驚くことに3案のうちの高欄、照明、ベンチ、植栽のどの組み合わせがいいかといった順列組み合わせ的なデザイン決定内容までを含んでいた。

98年 2月 市民団体が建設計画に「反対64%、賛成23%」とのアンケート結果をまとめる。

市が橋の工事費を予算化（総工費約6億円）。

同年 3月 市がアンケート結果を発表。橋のイメージは「和風」案が最多の4割を占める。

このアンケート集計によってデザインの方向性は市民が決めることとみなされることとなった。そのデザインとは下部が欧風（フランス風）で、上部が和風ということである。

同年 4月 着工時期を当初予定の7月から、納涼床の終わる9月中旬以降に延期すると発表。

同年 5月 榎本市長が「年度内に着工したいが、強行はしない」と言明。

同年 6月 住民投票で建設計画の是非を問う市民団体が発足集会を開く。

意見書の提出等では何も変わらない為、市民団体が橋建設の是非を問う市民投票を実現する為に、市民投票条例制定の条例制定直接請求をしようとしたもの。

同年 8月 市が橋の建設計画の白紙撤回を発表。将来的には市民合意を得たうえで、改めて計画を練り直すことを表明。

同年 9月 架橋賛成派住民団体が同じ場所への新たな歩道橋建設を請願。

ひとつの橋の建設計画をめぐる事件であったが、ここには行政主導の計画の現実が見られるようである。そしてパブリックデザインに対する行政の認識の実態（特に古都における現実）、実施に向けたプロセス、市民意見の反映の仕方、デザイン決定の手法等、行政側だけとは言わないが日本の都市デザインに対する大変な誤解が象徴的に表面化している事件であったと思われる。また一見、市民運動によって白紙撤回になったように見えるが、8月23日に行われた「ポンデザール市民投票の会」の勝利集会でも、皆がこれが市民運動の勝利だなどとは思っていなかった。現実には政界、財界からの支援を減らしつつある

市がようやく危機感を持ったと言うべきで、京都の経済界の世代交代による求心力の低下と次の市議選に向けた与党がこれ以上引きずっていては不利になると判断したことが要因であると言えなくもない。逆にそこに市民運動がうまく着地点として利用されたとも言えるだろう。市民団体にとっては逆に市民投票条例制定の機会を失ってしまったわけでもある。ひとつ収穫があったとするならば、小さな橋の問題が市民にいくつかの問題意識をもたせる契機になったのではないかということである。

- ・異なる文化と歴史をもつ都市のあいだでの文化交流のあり方とは？またそのモニュメントの必然性はあるのか。
- ・古都における現代の造形、過去の造形、また日本の形、西欧の形とは。
- ・場所がもつ意味とそこでの公共デザインのあり方とは。
- ・都心の河川敷オープンスペースの価値とは。

このようなことが市民レベルで活発に、自発的に議論されたことは今まで京都ではなかったのではないだろうか。また行政主導の計画については変更が出来ないと思っていたことが、そうでもないと思い始めたことも収穫かもしれない。このように今回の事件によって皮肉にも、市民にとって専門家の領域だと思っていた都市計画がより身近なものとして感じられるようになったのかもしれない。

今回は市民運動にやや専門的な立場で関わっていたが、そこで一番感じたことは、反対者側の研究者、計画家、デザイナーに

も考え方、スタンスの違いがあり、反対者としてまとまることは出来ても、いざ対案をまとめることになった場合のことを考えるとなかなか難しいであろうということであった。そしてこれは専門家側の今後の、また永遠の課題でもあるように思われる。

この事件の結末として、フランス・ルモン紙は下記のような論評を京都市の発表に対応するかたちで載せた。皆さんはこの記事に何を感じられるであろうか。

「エリゼ宮（大統領府）は京都・芸術橋の闘いに破れた」（1998年8月8日東京発 特派員 フィリップ・ポンス）

京都芸術橋をきっかけとする「戦争」はすんでのところで回避された。パリ芸術橋に着想を得た歩道橋は「日本におけるフランス年」のイベントの一環として京都に実現される予定であったが、しかし建設案への反対者が勝利を収めた。かつての天皇の都、その現在の行政府は8月6日に以下のように宣言し、パリ風の橋の建設を断念した。樹木頼兼市長はいう、「住民の十分な理解を得ずにやみくもに橋を建設すれば、行政府に対して否定的な印象を呼び起こしてしまう。【パリ風の】橋の建設案は白紙に戻し、新たな基礎条件の上で【やはり橋を架ける】話を進みたい」【訳注：市長の談話の邦文を訳者は入手していないので原文訳のまま】。

歴史的な河川である鴨川に芸術橋を架けようとする計画は、「日本におけるフランス年」の催しと「パリー京都友好40周年」を銘記するため、「常設の記念物」を京都に残すことを狙っていた。本年四月、ジャック・シラク氏の臨席を得て始まった催し物の諸テーマの中で、橋は重要な位置を占めていた。記念式典でのシラク氏を評して、「日本人の心の中に【届いた】フランス」などという見出しが踊っていた。もちろん、京都の住民はそのようには受け取らなかつた。新聞が「フランス風」と名付けた当の橋は、日本の象徴としての京都に「自分の」橋を押し付けようとするフランスへの嫌悪感をそそる一因となつた。橋の計画案の審美的な理屈付けは用心して聞かなくてはいけない。フランス側の仕掛け人の考えでは、パリ芸術橋の独創的な点、つまり構造が透けて見えることや軽妙な構造などに着想を得て歩道橋を架けることだった。皮肉屋にいわせれば、京都はすでに十分破壊されているから、橋が出来たところで古都の調和など【ないのだから】壊すことなどない、となる。何よりも、この計画の進め方がひどかった。住民の反対によつ

て一度放棄された架橋案を、市長はもう一度蘇らせようとした。しかも、1996年のシラク大統領が日本訪問した際に差し出した助け舟に飛びついたのだ。こうして、少なくともその始まりの時点においては、フランスは心底良心から計画案を支持したのだが、それがフランスのイメージをよもや傷つけることとなろうとは。

計画案はたちまち論争を呼び起こし、それに反対する川沿いの住民や建築家、造園家など者が相次いで声を挙げた。パリの首脳部はこれらの反対者達の存在を無視した。1997年の10月にル・モンド紙が反対意見を報じたにも拘らず、「日本でのフランス年」主催者達や東京の仏大使館は、反対意見を誇張した「事実の曲解」として憤慨した。彼らは京都市が行ったという「広範な」意見聴取〔訳注：計画案総覧の際の千四百人の意見〕をうのみにして、民主主義の原則は履行されているというへ理屈に閉じこもったのである。シラク氏は計画に反対する僧侶の書簡に次のようにさえ答えた

：「この計画は日仏そして京都とパリを結びつける友好関係をさらに深めるものであります」と。

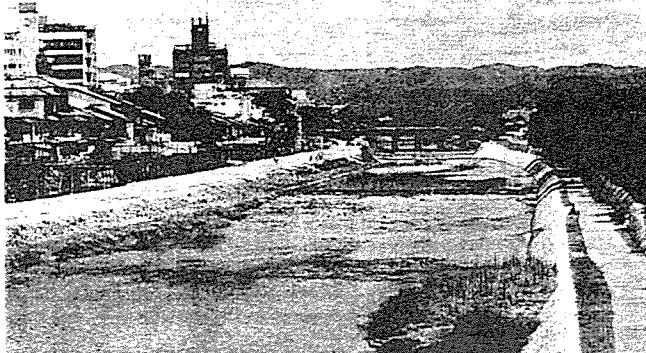
大統領府には明らかに情報が欠けていた。その当時、計画の当事者ではない「環境主義者達（エコロ）」の追撃が反対運動を盛り上げつつあったことを知らなかった。五月にはエコロ達が市庁舎に5万6千人の署名を突きつけ反対の請願書を提出し、七月には署名を3万人追加した。さらに、彼らは住民投票も辞さない覚悟であった。このような京都の住民の願いをもっと早く知りうるとして、フランスはこの事件から名誉を失わずに撤退することも出来たであろう。そうすれば、「京都年鑑」に「フランス橋事件」などと記載が残るのはしかたがないとしても、まさか市民から否認された市長と一緒にくたにされることはなかっただろうに。このように日本にもまた、民意が実在する。

フランス日刊紙『ル・モンド』芸術橋報道の翻訳（翻訳：伊従 勉）

京都市長官邸 1998年(平成10年)8月6日 木曜日

回収宣言を白紙撤去へ 鴨川芸術橋

現行の計画が白紙に戻されたことになった「鴨川歩道橋」の建設予定地（四条大橋から北を望む）



東京の中心部を流れる川の一つ、四条川（鴨川歩道橋）（仮称）の建設が予定していた京都市は五日、パリ市の「シラク・シャン」（环境省）の理念を尊重する現在の建設計画の白紙撤回を決めた。市は「市民の意見を尊重する」（以下略）ただ橋の必要性は変わらないとしており、実質的には市民合意を得た上で、おもな計画を断つ。九六年秋に計画が持ち上がり以来、「住民は個別」と賛成の声があつたが、京都市の幹部は計画が他の手続を必要とするべく、市民団体から反対運動が起きるなど、世論を二分化させた問題を避けようとした。計画が田舎に屬するか、心の決着をなせられた。（3面に閣議記事）

必要性 変わらず 計画練り直し

市民合意を優先

した橋の建設を実現。京都市は九九年度中の完成を目指す。昨年十月には京都市、京都市の開発課（アーバン計画課）



予定されていた歩道橋の位置
現行の計画が白紙に戻されたことになった「鴨川歩道橋」の建設予定地（四条大橋から北を望む）



予定されていた歩道橋の位置

現行の計画が白紙に戻されたことになった「鴨川歩道橋」の建設予定地（四条大橋から北を望む）

宮島の景観論争

松波 龍一

MATSUNAMI RYUICHI

株都市環境研究所

安芸の宮島は、厳島神社を中心とした約430haが1996年12月6日に世界文化遺産に登録された。日本三景のひとつとして、海上に張り出した目の覚めるような構成をもつ寝殿造りの社殿群はつとに有名であり、少なくとも対岸の大野町、廿日市市を含めた大野瀬戸の景観は、瀬戸内の最も優れた風光として大切にしなければならないものである。

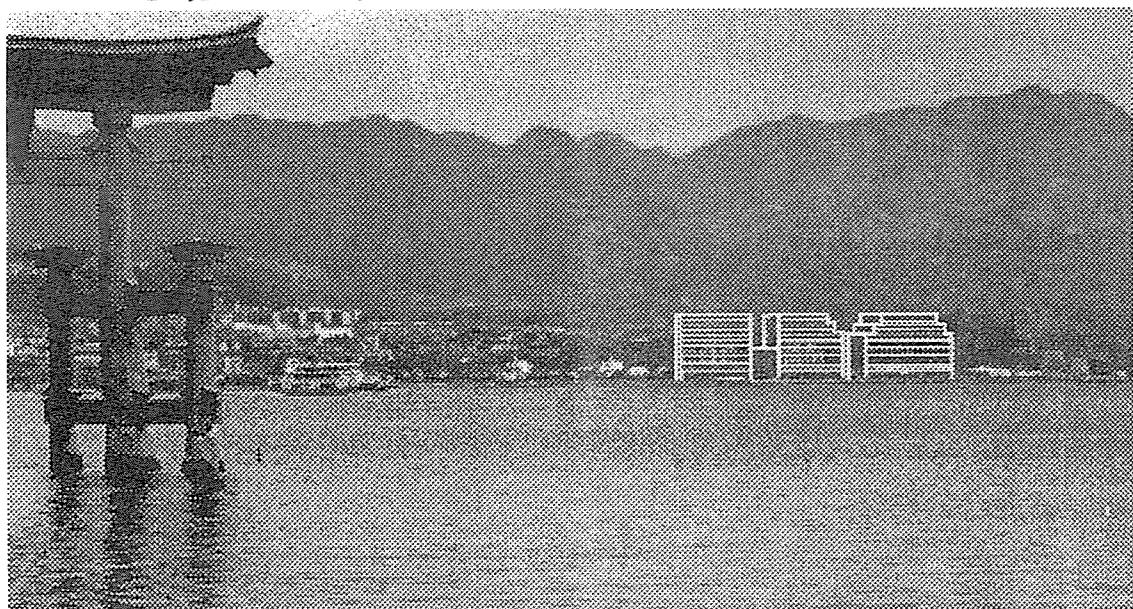
ここで今さし迫った景観論争がおこっている。廿日市側にあったナタリーという遊園地が閉園し、その跡地に大型マンションが建つことになったのである。旧暦の6月17日に催される管絃祭で、厳島神社と対岸地御前神社との間の海上渡御ルートの途中にあたる場所で、計画ではここに14階建てマンションを1期2期あわせて3棟とショッピングセンターを建てることになっている。1期分2棟はすでにほとんど建ち上がって来年春入居予定、2期分はこれから事前協議という段階。実質的な事業主はフジタである。何しろ目の前が宮島で眺めが売りのマンションにはなるだろうが、「高さ45メートル、幅200メートルの巨大な壁」という抗議の声があるように、単調な板状建物を屏風のように並べただけの構成は、およそ大野瀬戸への愛情を感じさせない冷酷なものだ。

周辺住民は、「世界文化遺産・宮島の景観を守る会」を結成して、県・市に対し、この建設計画の見直しについての請願運動を行っている。署名活動を展開しているのでご承知の方もおられると思う。詳しくは”<http://member.nifty.ne.jp/ZEM/>”などをご覧いただきたい。

この問題の難しさは、次の2点。まず、行為の主体が民間事業者であり、YESかNOで単純に片付かない側面がある。事業者も納得できるようなカウンタープランを、誰がどのようにして作成、提示するのかというレールが見えていない。それから、もともと対岸の市街地に蓄積された景観は、ひとことでいって、かなりひどいものだ。今回と同様に眺めを売りにした山麓の団地群や乱立する四角い箱。その中には、公共がからんだものも少なからずある。それなのになぜ、という思いが事業者の側にはあるだろう。今後の景観形成の方針とその覚悟を示さない限り、「本件だけ問題にするのは不公平だ」といわれれば、それも一理ある。

さて、今後の動きについて。とりあえず2期分の計画内容については再検討の意向を事業者が提示している。これを受けて、廿日市市と守る会を含めた協議の場を設ける動きが進められている。廿日市市は、来年度景観基本計画を策定する予定で、これも現在その準備が進められている。当面、これらの動きを期待して見守っていきたい。

この見守りかたは、地域の専門家にとって大変な試金石といえるだろう。せっかくの機会が単なる政治的妥協に終わってしまわないよう緊張して注目しておく必要がある。適切なタイミングで、気楽な「べき論」ではなく、リアリティのある主張を行っていく必要もある。「専門家がしゃしやり出て事態をかきませないでほしい」という不信感もある中で、今回の件ではまさに我々自身の力量が問われているともいえる。



ホームページに載っている計画案

※広報・出版委員会では、このような全国各地で起こっている都市環境デザインに関わるトラブルや論争などを継続的に追いかけていきたいと考えています。これまで、「鞆の浦」など各ブロック活動などで話題にしてきたものもあり、その後の情報や新規の情報について、会員の皆さんからの情報をお待ちしております。

巨大都市時代における地方都市の可能性

土橋正彦
TSUCHIHASHI MASAHICO
株アーバンスタディ研究所

1. 関西ブロック海外セミナー

関西ブロックの定例行事には月例の都市環境デザインセミナーと、年一回の都市環境デザインフォーラム・関西とがあったが、昨年から新たに年1回の海外セミナーが加わった。月例セミナーとフォーラムは会員相互の情報交換や都市環境に関心を持つ人々への情報発信を主な目的としていて一般にも公開するのに対し、海外セミナーは、海外の同じ関心を持つ人々との交流を通じて会員の知見を広めることに主眼をおいている。

第1回の昨年は、有志26名がイタリアの小都市を訪れ、「巨大都市時代における地方都市の可能性」と題したセミナーを開催し、また現地の市民と交流し、生活を体験する機会を持った。いろいろな面でわが国とは異なる事情のもとで、山間の小さな町がどのようにまちづくりに取り組んでいるのかを目の当たりにし、参加メンバーにとって、文献からだけでは知ることの出来ない貴重な体験となった。

2. イタリア・セミナーの概要

97年10月にイタリア、マルケ州の人口1,500人ほどの小都市メルカテルロを訪れ、大切に保存・修復された街並みのなかで、地元の方々と意見交換するセミナー、日本の都市環境デザインのプレゼンテーション(スライド・ショー及び都市環境ガイドブック・パネル展)、交歓パーティ、見学会等を開催した。日本からの参加者26人に加えて、セミナー当日には地元やイタリア各地から延べ100人近い方々の参加を得て盛況であった。表1、2におおよその行程とセミナー・プログラムを示す。

3. メルカテルロ・スル・メタウロ

(1) 位置

今回のセミナーを開催したメルカテルロ市は、直線距離でローマから北に約200km、フィレンツェから東南東に約100km、アドリア海から約50km西に入ったアペニン山脈の中の小都市である。

このアペニン山脈から流れ出て東のアドリア海に注ぐメタウロ川という小さな川がある。まちの名前は「メタウロ川の畔にある市場(メルカート=マーケット)」に由来する。

(2) 歴史

パオロ・チンチルラ氏の講演に沿って、メルカテルロの歴史を簡単に紹介する。

□まちの起こり

まちの歴史は13世紀頃に遡る。当時は麻の衣料や木材の交易で賑わい、中部イタリアの経済拠点のひとつであった。その経済力や自治権はなかなか強大で、現在に至る

表1 セミナー・行程

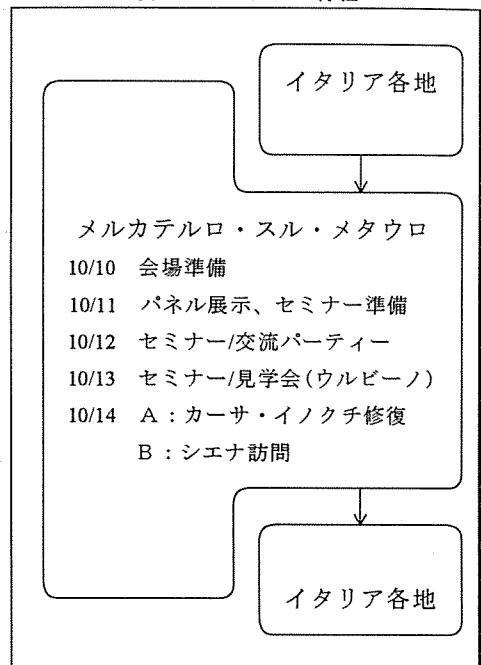


表2 セミナー・プログラム

巨大都市時代における地方都市の可能性

97年10月12日

第一部 イタリアの地方都市に学ぶ

- ①開会挨拶／土橋正彦 (JUDI関西)
- ②歓迎挨拶／アルフィエロ・マルケッティ (メルカテルロ市長)
- ③メルカテルロの過去・現在・未来／
パオロ・チンチルラ (メルカテルロ前市長)
- ④地方都市の都市計画／
パオロ・スパーダ (建築家)
- ⑤メルカテルロの自然環境保全
／パオロ・スパーダ

第二部 日伊交流パーティ

- ⑥スライド紹介・日本の都市環境デザイン
(JUDI関西ブロック会員)
- ⑦閉会の挨拶／榎原和彦 (JUDI関西)

総合司会 パトリツィア・ライ (建築家)
井口勝文 (JUDI関西)

97年10月13日

第三部 ウルビーノのまちづくり

- ⑧ウルビーノの都市計画／パオロ・スパーダ
- 第四部 現場視察
- ⑨ウルビーノ大学経済学部校舎修復工事見学

通訳 渡辺耕司

会場 ①-⑦パラッツォ・ガスパリーニ
(メルカテルロ市公会堂)
⑧ウルビーノ大学

今までまちの誇りであり続けている聖フランチエスコ教会もその頃に建立され、メルカテルロはこの地方の宗教の中心としての地位も占めていた。

□ルネッサンスの頃

その後15～16世紀のイタリア・ルネッサンスの時代に入ると、メルカテルロは自治権を奪われて政治的な地位を低下させるが、フィレンツエとアドリア海の港町コナを結ぶ交易路の上に立地するという地理的条件のもとで、経済的な繁栄はなお続いたという。セミナー会場であるパラッツォ・ガスパリーニも17世紀中頃に建てられたものである。しかし、1636年にこの地方が教皇直轄領に組み入れられた後は町の勢いは衰え、図書館を、したがって町の様々な記録も火災で失ったりという時代で、メルカテルロの歴史としては一番暗い時代であったという。

□イタリア王国時代～ファシズムの時代

イタリア王国が成立したのちの19世紀後半には、市壁を撤去し、現在町の中心になっている広場や市役所を建設するなど、都市計画的な事業が進められた。当時の町の経済的な基盤は農業であり、その収入だけで未来に向けたまちづくりが進められ、今世紀初頭には銀行も進出して町が活気を取り戻し始めた。

第二次世界大戦ではメルカテルロも爆撃を受け、いくつかの歴史的建造物を失った。なかでも聖フランチエスコ教会に面した貴族の館の被爆は、チェントロ・ストリコの中にオーバースケールのアパートを出現させてしまった。

□第二次世界大戦後

戦後は、経済の工業化に伴って小作制度が崩壊した。それにより、農業生産における経済的な搾取は無くなつたが、大都市へ

の激しい人口流出（およそ3,000人から1,500人に半減している）、農地の荒廃、商業の衰退といった悪い影響も生じて現在に至っている。

4. セミナーの成果

海外でセミナーを開催するのは関西ブロックにとって初めての試みであったが、多くの成果があった。その大きな理由は、縁を得てイタリアの、それも山間の小さな町で開催できたためであると考える。

メルカテルロに滞在したのはメンバーによって2日～5日間と、決して長い期間ではなかったが、まちづくりへの取り組みと成果、そして課題の実際をつぶさに確かめることができた。この経験は、参加メンバーが似たような状況に置かれているわが国の過疎地におけるまちづくりや風景づくりを考える際に、大きく役立つことであろう。また、過疎地に限らず、中小都市にとって中心市街地がどうあるべき存在なのか、さらに都市を取り囲む風景をどう考えるべきなのかという点についても、考えさせられる点が多々あったように思う。それらの具体的な内容については、井口、上野、柳原、森重、大矢の各氏の報告に一端をかいま見て頂けることと思う。

“大普請”の時代を終えようとしているわが国の状況と対比して考えるとき、イタリアの都市計画、風景計画の理念、さらにインフラや住宅の作り方、使い方、後世への伝え方等々、今回のセミナーは、参加メンバーそれぞれにとって日本での仕事に考えるヒントを多く与えてくれた。

5. 今後の展開

海外セミナーを定例化すること、また開催地の受け入れグループとの交流を継続するという二通りの展開を目指す方向に動いている。

第一の定例化については、昨年に引き続いて今年はインドネシア（ジョグジャカルタ及びバリ）を訪問するセミナーを開催する。現地の大学との共催の形を取り、昨年同様の成果が期待されるところである。

第二の交流の継続に関しては窓口となる組織が育ちつつあり、相互に訪問し情報を交換する場が再び持てればと考えている。

6. おわりに

最後に、この企画を受け入れて下さり多大な支援を頂き、さらに催しに参加していただいたメルカテルロの市民の皆さん、マウリツィオ市長、パウロ・スパーダ氏を始めとする現地の講師陣に感謝の意を表する。また、企画の種を播き、率先して計画を進め、宿舎までご提供いただいた井口ご夫妻に、深く感謝を申し上げる。



写真1

パラツォ・ガスパリーニ

第一日目のセミナー会場。17世紀の貴族の館。チェントロ・ストリコの広場に面している。市が買い上げて、様々な活動の拠点にすることを計画している。修復は端緒についたばかり。左側に市役所、商店、交番などがあり建物が見える。



写真2

都市環境デザインガイドマップ展

パラツォ・ガスパリーニの1階展示室。関西ブロックも翻訳に協力した英語版パネルを展示した。100部以上用意した解説冊子（英／和文）が足りなくなる盛況だった。

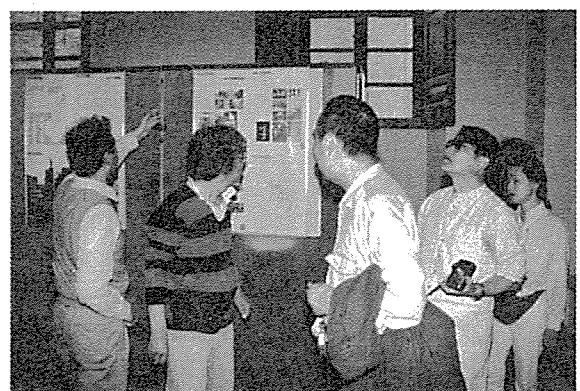


写真3

セミナー風景

2階の小ホールで開催した。

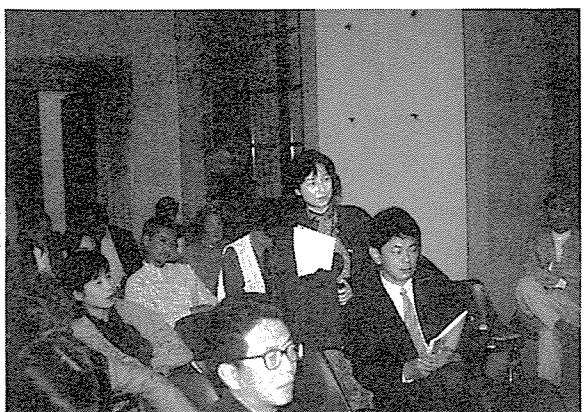


写真4 交歓パーティー

パラツォ・ガスパリーニ1階のホール。向かいのバールにお願いして簡単な食事と地のワインを供した。日本から持ち込んだ漆の入れ物に入れた焼酎も。日本の都市環境デザインのスライド・プレゼンテーション、記念品の贈呈等を行う。町中の老若男女で賑わった。



講演記録

前田祐資
MAEDA YUSUKE

株式会社学芸出版社

※付記

メルカテルロ市長マルケッティ氏の挨拶、前市長チンチルラ氏が語ったまちづくりの展望を付記する。

歓迎挨拶

アルフィエロ・マルケッティ
Alfiero Marchetti

メルカテルロ市長

市長のアルフィエロです。

私はまず、井口先生に感謝の意を表したいと思います。先生は日本のように遠い国から来られたのに、メルカテルロの人となじみあい、親しくなられている点に感心し、また感謝いたしております。

そして、チンチルラ先生、スパーダ先生に感謝いたします。チンチルラ先生は今日の会場となったメルカテルロの公会堂（パラツィオ・ガスパリーニ）の修復に、スパーダさんはメルカテルロの都市計画にとても重要な役割を果たして下さった方です。

20年前まではメルカテルロの建物はひどく痛んでいました。20年前から修復をはじめ、今ようやくこのような姿になりました。

それは州や国のお金を使ってできたことですが、同時に、メルカテルロの人たちが自らお金を出し、努力したことも強調したいと思います。

メルカテルロには、まだたくさんやらねばならないことがあります。しかし、こんな小さな街なのに、周りの環境を大切にした都市基本計画を持っている点で、イタリアの小さな街の中でも特別な位置を持ち得ていることを申し上げたいと思います。

また最近、山地にある小さな街の保存のための特別の条例ができましたので、それによって私たちの仕事がもっと進むことを期待しています。

イタリアでも小さな街よりも大都市を大切にする傾向があります。そのため保存・修復には困難もありますが、人間的な関係があるこういう小さな街をもっと大切にしたいものですし、メルカテルロの経験をベースにして、私どもの街のいい面を日本にもって帰っていただきたいと思います。

まちづくりの展望

パオロ・チンチルラ
Paolo Cincilla

メルカテルロ前市長

メルカテルロの未来について、申し上げたいことがあります。私は、これから先のメルカテルロを考えるとそれまでの歴史をよく考える必要があると思います。といつても昔の豊かな過去をくよくよと思うではありません。メルカテルロがイタリアの中でどういう役割を果たしていたかを考え、この風景がどれほど美しいかということ、ちゃんとした歴史があり個性がある街だということをベースに、活気のある街になることを願っています。

また、ここでいう風景とは自然だけではなく、人がつくったもの、例えばメルカテルロの街も含んでいることを強調しておきたいと思います。先ほど市長が言われたように、20年前から始まった新たな修復は、ここにおられる井口さんをはじめ、人びとが街を愛し、保存に力を注ぐことで風景を造っているということなのです。

ですから、この建物（セミナー会場のパラツィオ・ガスパリーニ、市が買い上げて修復中）を展覧会などのイベントの中心とし、よそから来る人との交流の場としていくことは、メルカテルロの街の活動にとってとても重要だと考えています。この他、メルカテルロには美術工芸品も多く残されており、それをオープンにすることも街の活気を取り戻す手法のひとつでしょう。

今や世界はコンピュータによって国境のない世界になっています。我々のようなイタリアの山地からも世界と直結できると思います。メルカテルロにおいて東京の仕事をすることもできるかもしれません。日本からの皆様がここにいるということも交流が始まったということを証明することでもあり、この街の将来にも希望があると言えます。これからも、人間性にあふれた小さな街だということをベースにして、この街が発展することを願っています。ありがとうございました。

メルカテルロとイタリアの都市計画

井口 勝文
INOKUCHI YOSHIFUMI

竹中工務店

1. メルカテルロの概要

メルカテルロ・スル・メタウロ（以下メルカテルロ）は面積68.59km²、中心市街地の標高429m、人口1,494人（1995年）、マルケ州ベーラ・ザロ・ウルピーノ県に属するコムーネ（自治体）である。

そのチェントロ（centro 中心市街地）に人口の80%が集中しており、そのうちの30%がチェントロ・ストリコ（centro storico 歴史的都心）の内に住んでいる。

就労人口約600人の内、農業13%、工業49%、その他38%である。小中学生130名、高校生96名で、14歳以下の人口に対する65歳以上人口の比率は81年109%であったものが91年には163%と高齢化している（いずれも1991年国勢調査）。1995年の統計によれば90年代に入って人口の減少傾向は弱まってほぼ横ばい状態になっている。

2. 都市基本計画と地区詳細計画

イタリアの都市計画は、チェントロとその周辺部に関する都市基本計画（Piano Regolatore Generale）と、その中に定められた特定の地区を対象にする地区詳細計画（Piano Particolareggiato）によって規定される。この2つはいずれもコムーネが策定するものである。

都市基本計画の位置づけは日本の都市計画地域の指定に相当する。しかし2つの点

で大きく異なっている。まず、イタリアでは都市基本計画で定められた地域の範囲にのみ建築行為が許可（確認ではなく）されるということであり、しかもその範囲は極めて限られている。

もう一つの相異点は、都市基本計画によってチェントロ・ストリコの範囲を定めることである。都市の歴史的な資産を守り、活用しながら時代に即した都市の発展の方向をコントロールしようとする意図がそこに含まれている。

3. メルカテルロの都市計画

メルカテルロではかつて市壁で囲まれていた5.5haの範囲をチェントロ・ストリコと定めている。そしてその保全計画は地区詳細計画のひとつとして策定されている。

人里離れた丘の上にある、かつてメルカテルロのチェントロを護る要塞が設けられていた。20戸程度の住戸と礼拝堂、見張り塔のある集落だが、すでに住む人もなく見捨てられて久しい。しかし丘の上にそびえる集落の美しい姿は今も町の人たちにとつて大切なシンボルであるらしく、この集落を保全する地区詳細計画も定められている。わずかだが修復の事業も行われている。

チェントロ・ストリコを取り囲むようにして戦後の市街地が拡がっている。殆どが庭付きの戸建て住宅や小さな共同住宅であ

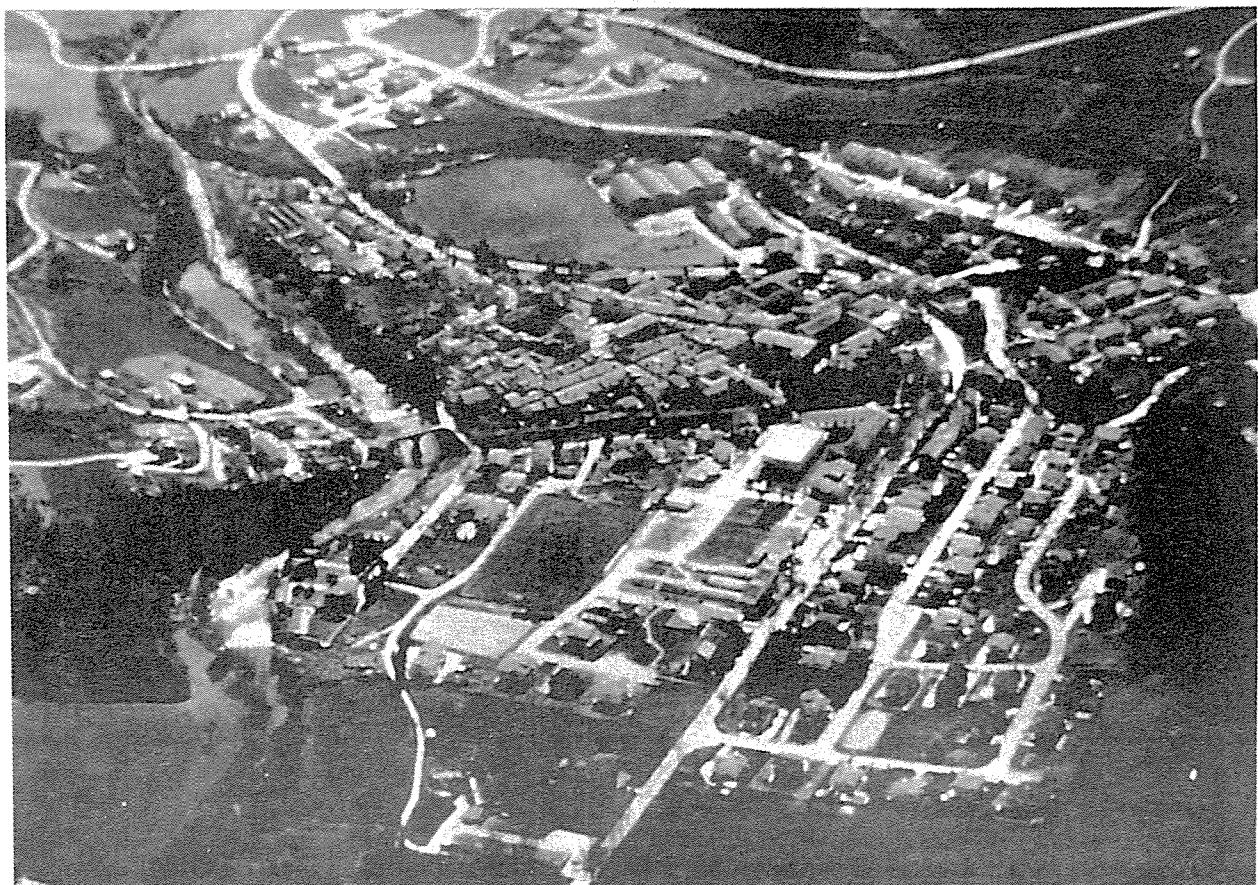


写真1 メルカテルロのチェントロ全体像



写真2
メルカテルロのチェントロと周囲の山並

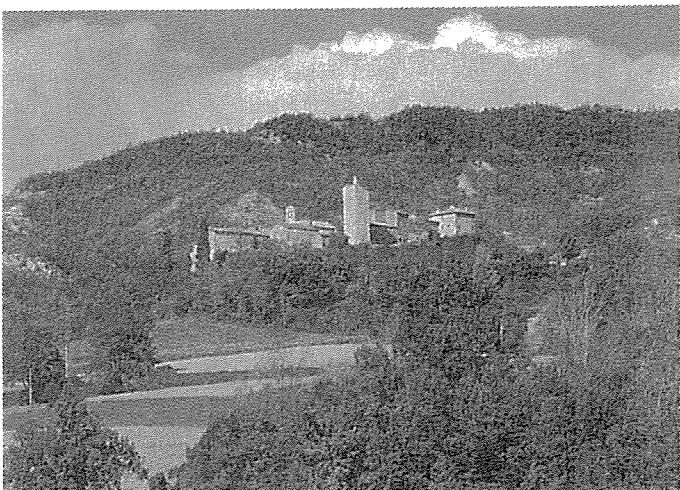


写真3 丘の上の要塞集落

る。小規模な工業団地も造成されている。これは建具や家具、食肉加工等の工場と住まいが一緒になった職人団地である。

小中学校、スポーツ公園、緑地や墓地がある。これ等が都市基本計画によって位置づけられている。そしてこれ等の市街地の外には一面の農地と山林が広がっている。

4. 風景計画のめざすところ

1964年のジャンカルロ・デ・カルロによるウルビーノの都市基本計画はその後のイタリアの都市計画とチェントロ・ストリコの再生計画に大きな影響を与えた。そのウルビーノはメルカテルロの東方34.5kmのところにある。この地方に点在するチェントロの都市計画はいずれもウルビーノの影響を受けているように思われる。

ジャンカルロ・デ・カルロは1994年、パオロ・スパーダと協働して新しいウルビーノの都市計画を発表した。そしてそれは、1985年のガラッソ法に基づく風景計画に重点が置かれている。

パオロ・スパーダはウルビーノの新しい風景計画について「今まで富士山を美しくする計画にすぎなかったものが、今度は富士山と富士山を取りまくすべての風景をひとつのものとして考えているようなものだ」と語った。チェントロから眺める周りの風景、遠く離れて眺めた時のチェントロや山や丘、田園や木立ちの風景、それ等の景観の質をどのようにつくるしていくのか、ウルビーノの風景計画はそのことに挑戦している。

メルカテルロはまだ、この新しい風景計画を持っていない。広大で豊かな山々と丘、そして田園を持つメルカテルロにとって新しい風景計画の策定は重要な課題であると、市長のアルフィエロは語る。

そして風景計画も、チェントロ・ストリコや丘の上の集落の地区詳細計画も、いずれもメルカテルロの環境を美しくすること、そして美しくすることが自分たちの生活の質を豊かにすることになるという意図を持って策定される。町を美しくすることで観光客を集めたい、商業を活性化したいということが直接の目的ではない。それは自分達の生活の質を高めるために欠かせない課題であると考えられている。

イタリアの都市計画に学ぶべきところは実はそこにあると今回は考えさせられた。

トスカーナ、マルケの風景

上野 泰
UENO YASUSHI

ウエノデザイン

中部イタリアの脊梁山脈、アペニン山脈は標高1000m級の山並みであり、その東西に広がるトスカーナ、マルケ両州の山陵地帯の典型的風景は、地形のままに広がる麦や葡萄の畑、牧草地、オリーブや栗の疎林、荒れ地とカシ類を主とする自然林、中世の面影を残す丘の上の街、点在する農家のモザイクである。それらが視界の果てまでも続くモザイクのうねりとなって、起伏に富んだダイナミックな風景を造り出し、見るものを魅了する。

このような、広大な風景を造り出している要因の一つとして、視界をさえぎるような大きな樹木が少ないと気が付く。また、地形なりに耕された牧草地や畑の、小石混じりの乾燥した土壌を見ると、エロージョンが懸念される。事実急な傾斜地では、回復困難なほどの土砂の流失の結果、白い岩肌が露出しているところもあり、農業による土地への過負荷が想像される。

このような状況を造り出している背景に農業構造の問題があると、P. チンチルラは指摘している。1950年代の世界経済の変化の中で、イタリアは経済成長期を迎える。イタリア経済は、小作制度による農業から工業へとその中心を移した。そうした変化の中で、それまで農業を支えてきた小作制度は10年くらいの間に姿を消した。農業人口の減少と、機械化、大規模化という変化は、それまで土地条件に合わせて、小規模に多様な作物を作ってきた農業のあり方を大きく変えてしまった。自給的農業から商業的農業への転換は、地形条件を無視してトラクターで耕耘する、大規模な農地を生

み出した。

また農地の拡大は、森林の減少を招き、もはやこの地方が10~11世紀には木材の生産地であったという面影はない。

自然保護という面においても、農業の問題は重要な問題である。1985年に自然保護に関する新たな法律（ガラッソ法）ができたが、保護区域の設定に関して地権者の抵抗があると言われる。農地と自然地がモザイク状に入り組むこの地方では、特に線引きが難しいという。

いずれにせよ、この地方の風景の問題の「キー」は農業であるが、イタリア農業のE.Cにおける競争力は決して高くない。農業国フランスと比して、食料の自給率、農地面積、農業人口あたりの農地面積においてかなり下回る。

P. スパーグダは、農業と自然環境のバランスが重要なポイントであり、大規模な土地改変をともなう形態から、この地方の変化に富んだ土地条件を生かした伝統的農業のあり方を再評価すべきであると示唆している。このような視点の変換は、農作物をグローバルな商品から、再び地場の食物という位置へと引き戻し、地域の特性に密着した新たな「豊かさ」を生み出す鍵となるかも知れない。

こうした問題は、我国も無関係ではない。林業の衰退や、伝統的農業の消滅が自然環境に大きな影響をもたらしている。

これからは、産業の問題としてだけではなく、自然環境、食物の安全性といった視点から、農業のあり方を見直すことが求められる。



マルケ州北部フロンティノ付近の風景 (URBINO e ...AZIENDA DI PROMOZIONE TURISTICA URBINO)

ウルビーノの都市計画と歴史的地区の保存

榎原 和彦
SAKAKIBARA KAZUHIKO
大阪産業大学工学部

マルケ州の宝石と称えられ、イタリア・ルネサンスの生きた記念碑であるウルビーノ。この町の建設にはレオナルド・ダ・ビンチも加わったと言われる。ウルビーノの街を案内して下さったパオロ・スパーダ氏の解説によると、面積220 km²、人口15,000人のこの地域で、1960年代当時、住宅のスプロールによって街の元のかたちが壊されていく状況にどう対処するかが課題であったとのこと。そのためにジャン・カルノ・デカルデによって1963年に、ウルビーノ都市基本計画がつくられたという。開発は、ウルビーノ市街地（歴史地区）を中心とするのではなく、集落にも人口をはりつけるものとし、歴史的経緯と環境条件にもとづいて住宅配置をしている。ウルビーノ市街地の形態を取り戻すために、1400年代の城壁の代わりに植物で囲いをつくることが考えられている。

交通に関しては鉄道の計画もあるが、やはり、自動車をどう処理するかが第一の課題で、駐車場を、景観を壊さないように歴史的中心地区からできるだけ離し、街の中ではエレベータ、エスカレータなどを使うことを考えているとのこと。

歴史地区の保存に関しては、“素材”が大きな問題になっているようである。

近年、建物ファサードをモルタル塗りにするのが流行っているそうで、元々そうであるところはよいにしても、今までの雰囲気を壊してしまうのは問題。それに、新しく塗られるものでは、モルタルの作り方が昔とは異なるので同じ色が出ないらしい。ドゥカーレ宮殿にしても、1600年代の設計当時は、煉瓦ではなくモルタル塗りが意図されていたそうで、修復の際は、設計意図に忠実にモルタル塗りにするか、親しまれてきた煉瓦にするかが大問題になり、結局は、長く続いてきた状態を大切にすること

に決まったという。また、道路は石か煉瓦だが、石は安価な北イタリア産のもので、最近になって使われるようになってきた石なので問題となっている由。いずれにしても“素材”的問題は、今イタリアで大論争になっているとのこと。

建物の保存も、ウルビーノの歴史地区をどう発展させていくかを考えて行っているとのことで、元は僧院であった建物をウルビーノ大学の施設に造り替えていた。工事中のところを見せていただいた。わが国で、煉瓦や石造りの工場、倉庫などをレストラン、観光施設などに改造しているのと同様であるが内実はまるで異なる感じられる。もっと骨太の確かさがある。歴史的経緯と価値の確かな把握と街の将来のあり方を見据えた上でのものだからだろう。



写真-2 僧院の修復・再利用

元の小屋組はそのまま残し、鉄骨で補強小屋組と中二階回廊を造っている。保存部分と付加部分は対比的に処理され、その差は明瞭である。

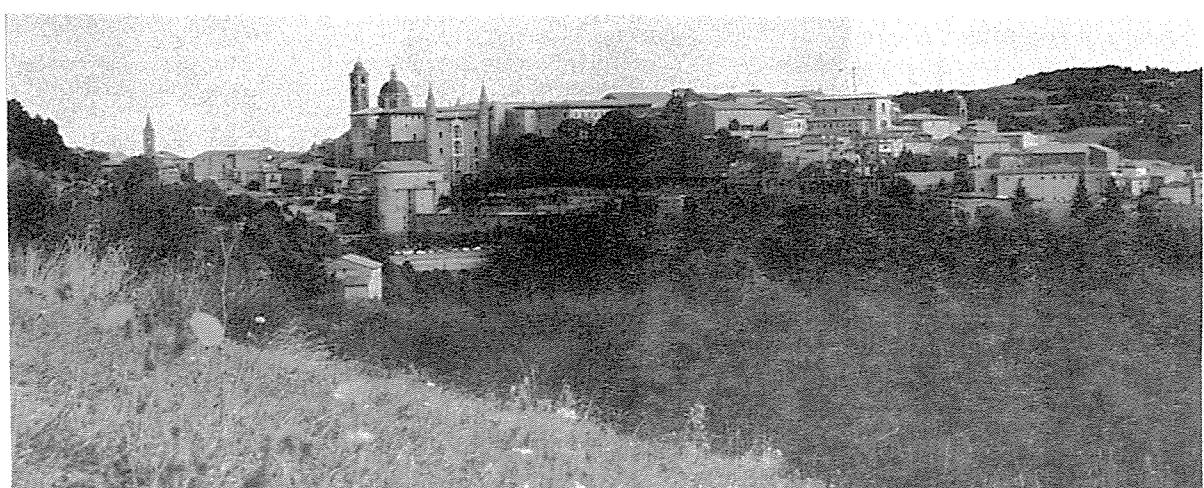


写真-1 ウルビーノ歴史地区の風景 視界保護に基づく周辺の景観保全によって街の全景を眺めることができる。左方がドゥカーレ宮殿である。

イタリアの生活

築500年の家を
修復して住む

メルカテルロ・
井口邸の場合

森重 和久
MORISHIGE KAZUHISA
株式会社ジイケイ設計大阪事務所

1995年の正月、井口さんから「今年は Mercatello の我が家が一部完成します。」とスケッチ入りの年賀状をいただいた。場所もわからないまま「家を建てておられるのですか?」と尋ねたところ、「梁が折れているので大変だ。実測図面を作らないといけないし、手伝ってよ」と言われ、「僕のできることならやりますよ」と簡単に答えていた。そのうち場所がイタリアだとわかり大変なことを受けてしまったと思った。後日気の合う JUDI 仲間と話をしているうちに、4~5人で修復に行こうとなったのが、今回の計画の始まりであった。その後、行くのであればトリュフの食べられる時期がいいのではとか、折角なら現地の人とも交流もとか、当初と目的が違う意味合いでも広がり、初心と違う人々も参加する国際セミナーという企画が出来上がった。

とにかく出発し、ローマ経由で現地に入る本隊とミラノで分かれた我々先遣隊は、途中のサン・セポルクロ郊外でベッドやテーブルを買い込み、九十九折りの山道を東に進んでアペニン山脈を越え、目的地のメルカテルロ、築500年の井口邸へ到着したのである。

まず、井口邸は城壁都市のほぼ中心部に位置(図1)し、日本流で表すと組積造3階建である。しかし、構造壁は隅や端部は石や煉瓦を規則正しく積んだもの(石は日本の城壁と同様で、間知石を垂直に積んだ感じ)であり、そのほかの大部分は自然石と煉瓦を混用して天然モルタルで固めて積み上げたものである。開口部は、玄関だけは煉瓦でアーチ状に組み上げられており、その他は木製のまぐさで構成されている。

次に修復前の平面(図2)を見ると大小あわせて23室と屋根裏部屋1室で3つの暖炉と煙突がついている。ここで不思議に思うのは、1, 2階は同平面であるが3階の一部は隣接持主のものとなっていることである。日本の集合住宅でも時々見かけるが、構造体は共用で触ることの出来ないのが普通である。しかし、井口邸の修復では構造体は見事に構造(幅1m、深さ30cm)がなされ設備配管が埋設されている。

また、梁は木製であるで電信柱を梁材とした感じである。隅部屋の梁は外壁に沿わせてあり、内側の壁や梁と繋結されて建物全体の剛性を保つ引張材として組構造の壁を支えている。

床は、梁の上に垂木を34cm間隔に架け、その上に構造用煉瓦(170×340×45mm)を並べてその上にモルタルを流し、化粧煉瓦を敷いて仕上げられている。修復の終わった所を階下から見上げると、一層の煉瓦で仕上がっていっているように見える。その煉瓦や梁をはずして修復するのだから、構造は一体何によって支えられているのかわからない状態である。

こうした建築のありようは、歴史的な都市を再生させることに努めているイタリアの伝統と文化も一因であるが、そのための職人が養成されていること、自分たちが育ったまちを愛し地域にある素材を利用あるいは再利用するのが気候ともあった一番長持ちするやり方であると信じていることも大きい。環境や自然を破壊しないことで自分たちの生活を守るという信念のようなものを自然に身につけて住み続けている住民に、ある種の凄さを感じた。

今回の旅行の目的である修復に何か一つでも参加するということで、到着翌日、先遣隊は1階の荒れたままの一室の掃除することにした。これがなかなか大変で、まず掃除の道具が無い。近所で道路工事をしているところに行って身振り手振りでスコップを借り、作業に取りかかったのだが、2階、3階を修復した際に1階の床に降り積もった天然モルタル(後で判った)が、スコップで動かす度にすさまじい埃になっ

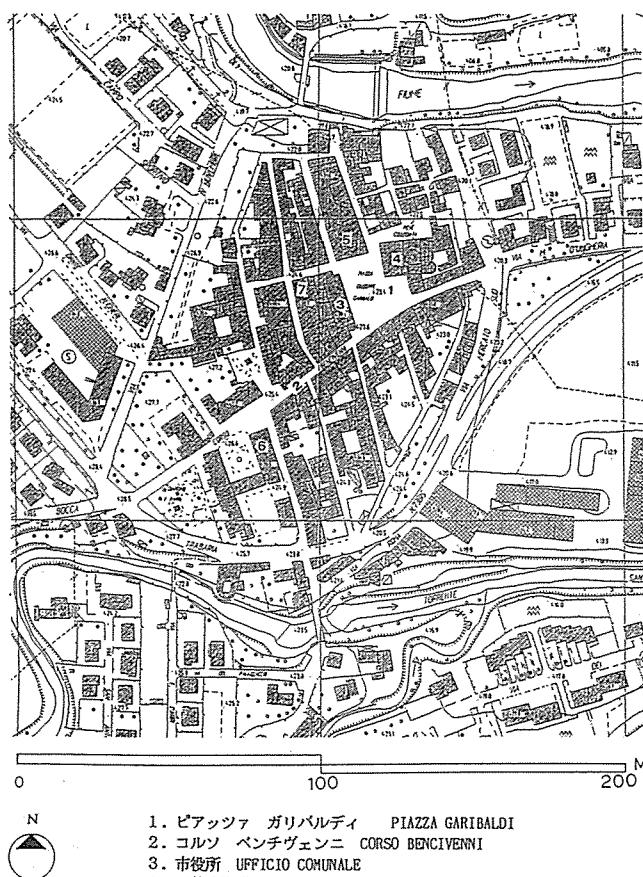
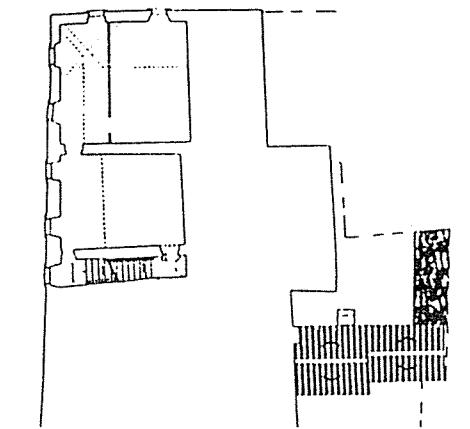
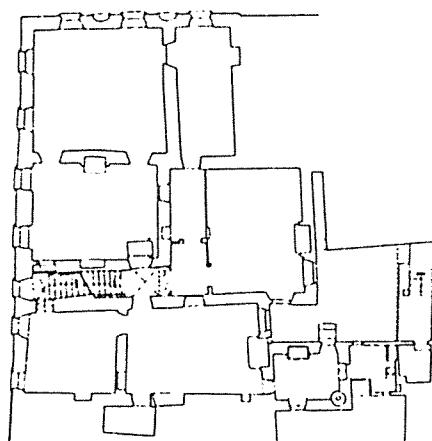


図1 メルカテルロ・スル・メタウロの
チェントロ・ストリコ

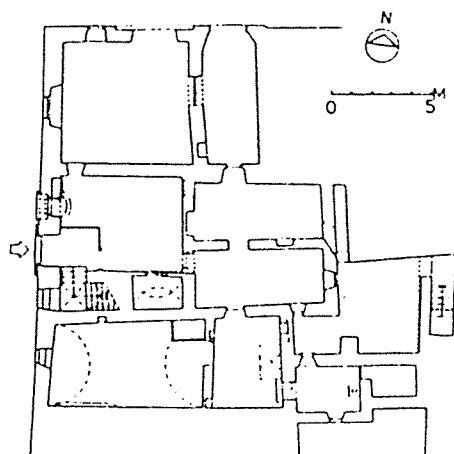
て舞い上がる始末である。これでは大変だとモルタルの埃とは知らずに打ち水をしたのだが、今度は床の構造煉瓦にくついて固まり始めるやら、身体中モルタルだらけで手はベトベト、体は汗でカチカチの状態



3階平面図



2階平面図



1階平面図

図2 修復前の家屋の実測図

となった。やっとの思いで一応床の構造煉瓦が見える状態まで掃除を終えた。直後に風呂に入ったのだが、配水管がつまるのではないかと心配になるほどであった。

その日は翌日のセミナーの準備と夕方到着する本隊の宿泊先の手配などに忙しく、一階の部屋は床が見えるだけのままで隣町のホテルに移動した。セミナーの公式行事が終了したあとメルカテルロを離れたため掃除に取りかかった部屋のことが気に掛かっていたが、帰国際に集合したミラノで、メルカテルロに残留したメンバーが旅行の目的を果たすべく床ブロックを一枚一枚剥がして掃除をしたと聞き、我々以上の大変な思いであったろうと推測した。また別のチームは近隣住民から鎌や鋤なども貸していただき、中庭の草抜きと整地もして見違えるように綺麗になったと後日掃除後の写真を見せられたときは感激であった。

この様にして築500年の家に住み続けるのは大変な事ではあろうが、私の周りで今日も壊されていく日本の住宅の様子を見ると、何だか空しい気持ちがこみ上げてくる。

この旅行ではメルカテルロのまちの人々の親切や暖かさを十分に感じることが出来た。それにもまして、井口邸から宿に帰る途中の真っ暗な夜道で見かけた動物の光る目、そして井口邸の暖炉の前で食べた奥さんの作られたおにぎりが良い思い出となつた。

井口夫妻に、心からありがとうございました。



写真1 未修復の倉庫部屋

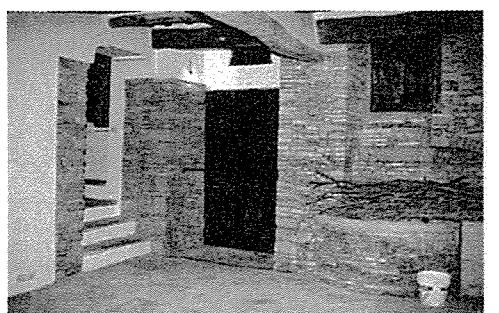


写真2 修復された玄関ホール

イタリアの生活

メルカテルロの街角

大矢 京子

OYA KYOKO

株都市環境計画研究所

「大矢さん、イタリアに行かない？」とお誘いを受け、それもイタリアの山岳都市。いつでも気軽に行けるような所ではない。メルカテルロには数年前に購入された井口邸があり、今回のイタリア行きの目的はカーサ・イノクチの修復工事、ウーン行ってみたい・・・。とお話を聞いてから半年後、少し忘れかけていた頃に「イタリア・トスカーナ/JUDI関西/ロングステイ・スペシャルセミナー・プログラム」なる資料が送られてきた。メニューは、イタリアのまちづくり・都市計画の実際を聞き、町の人たちと交流する公式行事に始まって、普通のイタリアの生活を楽しむ、職人工房を訪問する、歴史的建造物の修復現場を見学する、井口邸の修復工事に参加する等々、さらに自トリフがたっぷりの食の楽しみまで。スケジュールは毎年恒例の都市環境デザインフォーラム関西を終えて4日後の出発、これはなかなか準備は大変かなと思いつつ、そこはJUDI関西メンバー。役割分担が決まると事は着実に進み?、総勢26名がそれぞれのイタリアを期して国際セミナーに出発した。

ローマからバス。地震の傷跡も生々しいアッシジを経由して約280km。メンバーの一部が宿泊するメルカテルロ隣町のボルゴペーチェに到着。まず目についたのが広場にトリフ祭りのポスター。う~ん・うんうん「イイですねー」。今夜はワインとトリフで出足好調・・・。

翌日からの公式行事は他の皆様の報告にお任せして。セミナー後の足かけ3日間ではありましたが、ゆっくりメルカテルロの町に滞在し、目的の井口邸の修復工事を足手まといになりながら、中2階レベルの中庭のお掃除からまずは開始。草引きをしているとお隣のおばあさんが2階の（レベルが複雑で良くわからない）窓から顔を出して、ニコニコとイタリア語。どうやらカマかクリを貸して下さるよう。すると半地階（多分）の窓から息子さんが道具を差し出してくれ、作業が捗る。昼食を終え3時ま

でお昼寝。

その後は1階のギャラリーが予定されているスペースのお掃除。箒で掃いてもモウモウと埃が舞い上がるだけ。床にタイルが張ってあるから目地が見えるはずなのに?。これはどうもモルタルが固まっている様子。近くの農機具なんでも扱っているお店に行ってトンガやクリ（イタリアでは何というのか、身振り手振りで）を購入、薬局で防塵マスクも。タイルの目地が見えてきた。タイルが割れて床が落ち込んでいる所がある。部屋の隅に余ったタイルが積まれていたので、メンバーがタイルを並べ直そうと一枚ずつ剥がす。と、タイルは梁の上に渡してあるだけ。1枚ずつ外して隙間の埃を除く。ところが元に戻すのに一苦労。あわない元に戻らない、どうして?もとの場所に戻しているだけのつもりなのに。イタリアの職人さんの伝統技術、多分彼らは上手く納める技術を誇りを持って受け継いでいるのだろう。次回はその伝統の技術とプライドにも出会えればと思う。



写真2 床の状況

途中、部屋中に埃が立ちこめ、あまりの苦しさに外に出る。ご近所に迷惑をかけてはと、ドアを閉めたままにしていたため。マスクも顔も頭も埃だらけ。通りに出るとご近所のオバサン・オジサン、昨日セミナーでお会いした市長さんまで通りがかる。「ボンジョルノ」と真っ黒な顔でご挨拶。

一応旅の目的は果たし、日頃にない心地よい体の疲れは井口邸の日本式浴槽でと



写真1 中庭の掃除



写真3 CASA INOKUCHIの前の通り

り、夕食はメンバーご自慢の手料理。材料は近くのスーパーと農協マーケットで調達する。地のワインは殊の外おいしく、暖炉の火の温もりを背中に感じながら、ゆったりとした時間を楽しむ。



写真4 居間でくつろぐ

その後は広場の向かいのサッカー観戦で賑わうバールで、夜遅くまでお酒やカプチーノ、会話を楽しむ。夜更け広場を通ってエウロージャおばさんの民宿に向かうと、教会の鐘が時を知らせる。最初は朝・昼・夕くらいだと思っていたが気をつけていると15分おき。何百年も姿を変えない石造りの町並みに鳴り響く鐘の音は、周りの山々もまちの人々も包み込むように鳴り渡る。

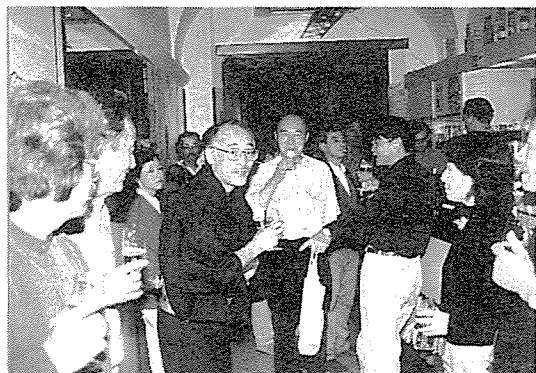


写真5 広場に面したバールの賑わい

翌日は、朝早く街をブラリと散策する。道路の片側に聖書の物語を石灰岩に彫った列柱が並ぶ。その道をたどると、どうも面積二千m²くらいの墓地のよう。参加メンバーに聞くと、ほとんどの人が訪ねていた。お墓を積み上げた壁面に美しい花が飾られ、見まわすと壁に梯子を立てかけ、墓守のようなオジサンが花を生け変えている。多分毎日のことなのだろう、亡き人を懐かしんでお墓参りする人達もいる。壁面だけでなく平地にもお墓がある。立派なお墓の中には古いものも混じるが、墓碑に刻まれた年代は10年くらい前までが多い。後でお聞きすると、何年か過ぎると別の場所に改葬すること。この地方の宗教や歴史・文化を多くは学ばずに訪ねたことを反省しつつ、私の田舎の墓地と変わらない人のぬ

くもりが、気持ちを安らかにさせてくれる場所として印象に残る。

お昼は、セミナーでもお話に出ていた、少し大きな隣町のサンタンジェロインバドへ。本格レストランのトリフを食べようと、井口さんご夫妻と共に7~8人で行く。車を降りたところで、セミナーに来られていた地元の方に偶然出会い、街の中心より少し離れた素敵なお店を紹介して頂く。トリフづくしのコースを満喫。その上、レストランのオーナーが所有する中世の古城まで見学させていただく。また、町中のバールでは、井口ご夫妻の友達（メルカテルロのバールのご主人と許嫁）や地元の彫刻家にも出会い、さらに楽しい時が流れる・・・。

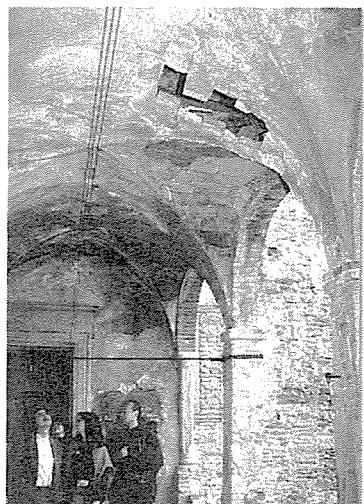


写真6
中世の館
いすれ修復される

トリフづくしメニュー

- 1) 前菜のカナッペ
 - ①ガーリックバターとトリフ
 - ②キノコのソース（フンギ？）にトリフ
 - ③溶けたチーズにトリフ
- 2) 平面のパスタ
 - ・平面のパスタのオリーブオイル味にトリフ入り
- 3) キノコのラビオリ
 - ・フンギのラビオリにトリフのトッピング
- 4) クリームソースのラザニア
 - ・チーズとトリフ入のクリームソースのラザニア
- 5) ルーコラとチーズ（パルメジャーノ？）とトリフのサラダ
 - 牛生ハムとチーズ（パルメジャーノ？）とトリフの料理
- 6) パン
- 7) デザート
 - トリュフ・コン・カフェ
 - トリュフの形にしたバニラアイスクリームの上からカプチーノを注いだもの
 - レモン・ジェラード

今回のセミナーに参加させていただいたこと、また井口ご夫妻のおかげで、メルカテルロの人々と素晴らしい交流を持てたことに感謝している。帰国後、有志が集まり（仮）大阪メルカテルロ協会を設立した。この集まりを通じて、お互いに学ぶところの大きい、そして心温まる交流が永く継続することを願っている。

ブロック例会レポート

■北海道ブロック

柳田 良造

YANAGIDA RYOZO

北海道ブロック幹事

(株)柳田石塚建築計画事務所

北海道ブロックは会員の勉強を主とするミニシンポ、会員外にも幅広く呼びかけたフォーラムなどの活動を行っているが、9月9日43名の参加者をえて、街の色彩についてのフォーラムを行った。「色の使い方～色はとっても大事ですー色あそびを通して札幌のイメージをみんなで考えてみましょう」というテーマでカラーコーディネーターの半田三千代さんを講師に向かえ、

札幌のまちのイメージや色についての話を楽しく聞いた。札幌駅前の建物の色にはどのような色が合うのか、参加者が色見本を見ながら選んだワークショップなど、具体的に街の色について考えることができた。フォーラムの中で札幌のイメージについてアンケートをとったが、この結果はまとまり次第、報告する予定である。

■関東ブロック

作山 康

SAKUYAMA YASUSHI

関東ブロック幹事

(株)都市環境研究所

◆関東ブロックセミナーのご案内

「ウォーターフロント空間デザインのあり方を問う」

—東京湾岸地域における諸開発事例を中心^に—

<開催主旨>

20世紀の開発の中で郊外部の新都市（ニュータウン）開発とともに特徴的な開発形態である「ウォーターフロント開発」に焦点を当て、千葉・東京・神奈川の東京湾岸地域におけるウォーターフロントの都市環境デザインについて、現状を評価・検証し、さらに今後のあるべき姿についても議論を深めたいと考え、セミナーを企画しました。今回は、特に空間論、デザイン論を中心に議論してみたいと思います。

<会場等>

日時：平成10年10月17日（土）午後2時～5時

場所：東京みなと館・プレゼンテーションルーム（青海フロントアピア20階）

<プログラム>

1. 基調講演

●阿部 和彦（（財）日本開発構想研究所）

演題「東京湾岸地域の開発動向について」

●飯尾 豊（東京都港湾局開発部）

演題「東京臨海副都心の開発について」

2. プrezentation

●佐々木葉二（ランドスケープアーキテクト）

●柴田 知彦（建築家）

●近田 玲子（照明デザイナー）

●中野 恒明（都市デザイナー）

●西沢 健（工業・環境デザイナー）

申し込み：（株）都市環境研究所内 作山康宛

FAX03-3818-2993

会費：会員・学生1,000円、会員外2,000円

◆第2回ヨコハマ都市デザインフォーラム

・都市デザイン専門家会議

「都市デザインにおける専門家間のコラボレーション」

<開催主旨>

第2回ヨコハマ都市デザインフォーラム
「21世紀に向けた都市活力と魅力的空間

の形成—都市の持続的発展と地区の発想から」において、当フォーラムの後援団体である都市環境デザイン会議では、関東ブロックが中心となり、事業委員会の協力のもとに都市デザイン専門家会議を企画するものです。

この都市デザイン専門家会議は、当フォーラムにおいて、市民まちづくり会議、自治体まちづくり会議と並んで位置づけられるものであり、プランナー、建築家、デザイナーなど、まちづくりや都市デザインに関わる専門家が集い、我が国の都市デザインを巡る共通の課題について自由に討議しようとするものです。

今回の専門家会議では、近年我が国における大規模なプロジェクトを中心に積極的に試行されている、マスターearkitekt制度、コミッショナー制度、デザイン調整会議制度などを含む、専門家間のコラボレーション（協働）を中心テーマとし、さらに、市民、行政も含めたコラボレーションのあり方まで、その可能性と問題点について議論する予定です。

<会場等>

日時：平成10年11月21日（土）午後6時～8時

場所：パシフィコ横浜会議センター会議室

企画：都市環境デザイン会議関東ブロック

<プログラム（予定）>

1. 話題提供

コーディネーター

・高橋志保彦（都市デザイン）

スピーカー

・土田 旭（都市デザイン）

・南條 道昌（都市計画）

・藤江 秀一（建築）

・曾根 幸一（建築）

・松村みち子（土木）

・中野 恒明（土木／都市デザイン）

・吉田 慎吾（色彩）

・東海林弘靖（照明）他

2. フリートーリング

都市環境デザイン会議会員、その他専門家、一般参加者から、自由に意見を発言してもらいます。みなさん、どしどし参加願い

ます。

申し込み：第2回ヨコハマ都市デザインフォーラム実行委員会TEL045-223-2525

問い合わせ：㈱都市環境研究所内 作山康宛 TEL03-3814-1001 FAX03-3818-2993

参加費：このプログラムだけの参加は無料

■四国ブロック

白石 高啓
SHIRAI SHI TAKAHIRO
四国ブロック幹事
ゆにて設計事務所

第一回街並みの魅力*宇和・大洲文化を支える人々

『四国再発見*環境デザイン紀行』を4回／年のペースで巡って行きます。第一回は「街並みの魅力」をテーマにして愛媛県宇和町・大洲市での見学と交流を計画しています。宇和町では文化の里の拠点[中町の町並み]が、伝統的建造物群保存対策調査及び修復事業も整いはじめた時期でプロセス及び今後の方向性や、四国の伝統的建造物群保存地区指定の事例などを提示して、[中町を守る会]の人たちと有意義な時間を持ちたい。また、基本理念に掲げた「まちの風景

をつくる*やすらぎ人の憩うまち」水郷大洲市の街並み、肱川整備、数寄屋建築の粹

・臥龍山荘など見学して、環境デザインの豊富な出会いになればと願っています。

開催日時：10月31日（土）13:30～11月1日（日）

交流会：江戸時代創業の文化の香り豊かな松屋旅館（宇和町）

お問い合わせ：四国ブロック幹事 TEL 0897-33-3028 ゆにて設計事務所 白石高啓

申し込み期限：1998年10月28日
FAX0897-33-3028

E-mail:unite @ dokidoki.ne.jp

■事務局より

1. 新会員の紹介

1998年7月1日～8月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

8月31日現在の会員数は、536名です。

氏名	勤務先
今本 隆章	都市地下空間活用研究会

2. 退会者（1998年7月～8月）

高澤禮志、野村脩、矢島隆（敬称略）

3. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容（新）
井上 隆志	高知県企画振興部企画調整課
上原 宏一	丸亀市教育委員会生涯学習部
菊池 武則	㈲ケーアイケー計画研究所 〒103-0021 中央区日本橋本石町 3-2-12 Tel03-3241-5411 Fax03-3510-1355
澤田 敦	㈱INAX建材事業本部SP課久米分室 〒479-0002 愛知県常滑市久米字鎧場36 Tel0569-43-2200 Fax0569-43-2202
土井 真一	㈱都市みらい総合計画研究所 〒113-0034 文京区湯島2-2-4 スワンビル9F Tel & Faxは変更なし

広報・出版委員会

土田 旭	松村みち子
澤木 俊問	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
作山 康	吉田 慎悟